

期 日 平成二十五年(二〇一三年)十月十二日(土)・十三日(日)
会 場 秋田大学手形キャンパス教育文化学部3号館

日本中国学会 第六十五回大会要項

日本中国学会

拝啓

時下ますますご清祥の段、お慶び申し上げます。

さて、日本中国学会第六十五回大会を、来たる十月十二日（土）・十三日（日）の両日にわたり、秋田大学手形キャンパスにおいて開催致します。万障お繰り合わせの上、ご参加くださいますようご案内申し上げます。

ご出席の方は、同封の振込用紙を使用し、必要な項目に○印をつけて、合計振り込み金額をご記入の上、平成二十五年（二〇一三年）九月二十日（金）までにお振り込みください。消印は九月二十日を有効とし、振替受領証をもって領収書に代えさせていただきます。振替受領証は、諸会費支払い済みの証明書として受付にてご提示いただく必要がございますので、大会参加の際にはお忘れなきようご持参ください。御文安をお祈り申し上げます

敬具

平成二十五年八月十日

日本中国学会理事長 川合康三
第六十五回大会準備会代表 吉永慎二郎

会員各位

日本中国学会第六十五回大会

平成25年(2013)10月11～13日

日	時	行 事	会 場
10月11日 (金)	13:00	理事会	秋田大学総合研究棟1階多目的共用講義室
	15:00	評議員会	秋田大学総合研究棟1階多目的共用講義室
10月12日 (土)	8:50	受付開始	秋田大学教育文化学部3号館 ピロティ
	9:20	開会式	3-145講義室 (60周年記念ホール)
	10:00	研究発表 I 哲学・思想部会 II 文学・語学部会 III 日本漢文部会	3-145講義室 (60周年記念ホール)
			3-255講義室、3-344講義室
			3-344講義室
	12:10	記念撮影	附属図書館前
	12:30	各種委員会	1号館、3号館各室
	13:30	研究発表 I 哲学・思想部会 II 文学・語学部会 III 日本漢文部会	3-145講義室 (60周年記念ホール)
			3-255講義室、3-344講義室
			3-344講義室
14:50	特別講演会(石川忠久先生)	3-145講義室 (60周年記念ホール)	
16:30	総会	3-145講義室 (60周年記念ホール)	
18:30	懇親会	秋田キャッスルホテル	
10月13日 (日)	8:50	受付開始	秋田大学教育文化学部3号館 ピロティ
	9:30	研究発表 I 哲学・思想部会 II 文学・語学部会 III 日本漢文部会	3-145講義室 (60周年記念ホール)
			3-255講義室、3-344講義室
			3-344講義室
	12:00	【理事会】	3-232 (第4会議室)
	13:00	研究発表 I 哲学・思想部会 II 文学・語学部会 III 日本漢文部会	3-145講義室 (60周年記念ホール)
			3-255講義室、3-344講義室
3-344講義室			
14:50	特別講演会(寺田隆信先生)	3-145講義室 (60周年記念ホール)	
16:30	閉会式	3-145講義室 (60周年記念ホール)	

■ 諸会費

・大会参加費 2,000円 (ただし日本漢文部会の漢文教育の研究発表のみの参加は無料)

・懇親会費 7,000円 (院生5,000円)

・昼食弁当代 1,000円/1食

・写真代 1,000円

■ 大会準備会本部

3号館121演習室

■ 学会事務局

同上

■ 休憩室

3-254講義室 (第1休憩室)

3-343講義室 (第2休憩室)

3-146講義室

■ 手荷物預かり

■ 書店出版社展示 3号館1階ピロティ及び3-150講義室

■ お問い合わせ

* 大学構内は禁煙です。喫煙は所定の場所(東門外側)にてお願いします。

* 大学の食堂は土・日は営業していません。昼食弁当はあらかじめお申込みいただくのが確実です。

* 12日の各種委員会、13日の理事会の出席者には昼食弁当が出ますので、お申込みいただくには及びません。

* 構内の駐車場は一部利用可能ですが、可能な限り車でのご来場はご遠慮ください。

■ ご案内

* 内藤湖南博士「湖南小稿」の特別展示(紹介54頁)は10月12日(土)、13日(日)の大会期間中、秋田大学付属図書館2階コーナーにて開催されています。

* 秋田市内の宿泊施設については55頁をご参照下さい。

* 日本中国学会「第二回次世代シンポジウム」は10月14日(月)午前9時～12時に秋田大学教育文化学部3-255講義室にて開催されます。

研究発表・特別講演等の会場・時間帯一覧表

		第一会場 (Ⅰ哲学・思想 部会) 3 - 145 講義室	第二会場 (Ⅱ文学・語学 部会) 3 - 255 講義室	第三会場 (Ⅱ文学・語学 部会・Ⅲ日本 漢文部会) 3 - 344 講義室
12 日 (土)	9:20~9:50	開会式		
	10:00~10:30	溝本 章治-11	高戸 聰-25	岩崎華奈子-39
	10:30~11:00	大形 徹-12	浜村 良久-26	白須 留美-40
	11:00~11:30	黒田 秀教-13	栗山 雅央-27	湯山トミ子-41
	11:30~12:00	木村 亮太-14	増野 弘幸-28	石井 理-42
	昼 休	【記念撮影】 (附属図書館前)		
		【各種委員会】 (1号館及び3号館)		
	13:30~14:00	村田 みお-15	大淵 貴之-29	佐藤 信一-46
	14:00~14:30	齋藤 智寛-16	山内 良太-30	小崎 智則-47
	14:50~16:20	【特別講演会】 石川忠久先生-52		
16:30	総 会			
13 日 (日)	9:30~10:00	高橋 睦美-17	竹田 治美-31	張 瑤-43
	10:00~10:30	田村有見恵-18	池田 智幸-32	楊 冠穹-44
	10:30~11:00	田宮 昌子-19	櫻木 陽子-33	徐 子怡-45
	11:00~11:30	黄 崇修-20	大島絵莉香-34	菅原 尚樹-48
	11:30~12:00	江波戸 互-21	高芝 麻子-35	韋 佳-49
	昼 休	【理 事 会】 (3号館2階第4会議室)		
		13:00~13:30	佐藤 麻衣-22	上原 徳子-36
	13:30~14:00	尾崎順一郎-23	大木 康-37	秋山 恵美-51
	14:00~14:30	田 訪-24	小塚 由博-38	
	14:50~16:20	【特別講演会】 寺田隆信先生-53		
	16:30	閉会式		

*氏名横の数字は、要旨掲載頁

*開会式・総会・閉会式・特別講演会はいずれも第一会場

日本中国学会第六十五回大会プログラム

第一会場（I 哲学・思想部会） 3・145 講義室（六十周年記念ホール）

十月十二日（土）午前

I・1 『莊子』齊物論篇再読（十時〜十時三十分）

溝本 章治

司会 関口 順（埼玉大学名誉教授）

I・2 戦国楚帛画の舟よりみる復活再生観念の考察

大形 徹（大阪府立大学）

I・3 戦国期における時代区分と史伝の形成と
（十時三十分〜十一時）

司会 宇野 茂彦（中央大学）

黒田 秀教（台湾明道大学）

I・4 『五行大義』と義疏学（十一時三十分〜十二時）
（十一時〜十一時三十分）

司会 宇野 茂彦（中央大学）

木村 亮太（大阪大谷大学非常勤講師）

司会 影山 輝國（実践女子大）

十月十二日（土）午後

I・5 「正書」、「正字」を手がかりとした写本時代の
書物作成過程をめぐる一考察（十三時三十分〜十四時）

村田 みお（京都大学非常勤講師）

司会 神塚 淑子（名古屋大学）

齋藤 智寛（東北大学）

I・6 『楞伽師資記』の禅法（十四時〜十四時三十分）

齋藤 智寛（東北大学）

司会 石井 修道（駒沢大学）

十月十三日(日)午前

I・7 六朝期における道の体得と身体観(九時三十分～十時)

高橋 睦美(東北大学)

I・8 『集注太玄経』に見える司馬光の「心」の思想

司会 宇佐美 文理(京都大学)

I・9 悲憤慷慨の系譜―朱熹『楚辞後語』にみる継承と展開

田村 有見恵(早稲田大学院)

I・10 儒医朱丹溪の情志三鬱説の原型について

司会 市来 津由彦(広島大学)

I・11 『悟真篇』翁葆光注成書考(十一時三十分～十二時)

田宮 昌子(宮崎公立大学)

十月十三日(日)午後

司会 土田 健次郎(早稲田大学)

I・12 張居正『孟子』解釈とヨーロッパにおける受容について

黄 崇修(台湾東呉大学)

I・13 袁枚の考拠学批判と「性霊」説(十三時三十分～十四時)

司会 土田 健次郎(早稲田大学)

I・14 劉師培に於ける『左伝』の義例観(十四時～十四時三十分)

江波戸 互(早稲田大学院)

司会 佐藤 鍊太郎(北海道大学)

佐藤 麻衣(筑波大学院)

司会 三浦 秀一(東北大学)

尾崎 順一郎(東北大学院)

司会 上野 裕人

田 訪(京都大学院)

司会 小林 武(京都産業大学)

第二会場（Ⅱ文学・語学部会） 3・255講義室

十月十二日（土）午前

Ⅱ・1 「日書」中の「巫」と「狂」との関係について

（十時～十時三十分）

高戸 聰（東北大学）

司会 谷中 信一（日本女子大学）

Ⅱ・2 『詩經』國風題名考（十時三十分～十一時）

浜村 良久（防衛大学校）、
水野 實（防衛大学校）

司会 大西 克也（東京大学）

Ⅱ・3 西晋武帝期における文人の著述活動とその立場

— 左思「魏都賦」の分析を中心に —（十一時～十一時三十分）

栗山 雅央（九州大学大学院）

司会 佐竹 保子（東北大学）

Ⅱ・4 阿倍仲麻呂歌の月と杜甫「月夜」詩の月について

（十一時三十分～十二時）

増野 弘幸（大妻女子大学）

司会 松原 朗（専修大学）

十月十二日（土）午後

Ⅱ・5 『白氏六帖』と白居易の文（十三時三十分～十四時）

大淵 貴之（鹿児島大学）

司会 澤崎 久和（福井大学）

Ⅱ・6 韓愈「石鼎聯句詩序」に見られる自己表現の特徴

（十四時～十四時三十分）

山内 良太（大東文化大学大学院）

司会 愛甲 弘志（京都女子大学）

十月十三日(日)午前

II・7 『祖堂集』における程度副詞について(九時三十分～十時)

竹田 治美(奈良産業大学)

司会 衣川 賢次(花園大学)

II・8 蘇軾「江神子」詞諸篇の受容と評價について

池田 智幸(立命館大学非常勤講師)

司会 内山 精也(早稲田大学)

II・9 『梧桐雨』雑劇の晩秋の季節(十時三十分～十一時)

櫻木 陽子(龍谷大学非常勤講師)

司会 井上 泰山(関西大学)

II・10 桃源瑞仙『史記抄』における

大島 絵莉香(名古屋大学大学院)

司会 花登 正宏(東京国際大学)

II・11 『円機活法』に見える四庫全書未収の詩について

高芝 麻子(横浜国立大学)

司会 花登 正宏(東京国際大学)

十月十三日(日)午後

II・12 松江「十八子社」をめぐる(十三時～十三時三十分)

上原 徳子(宮崎大学)

司会 市瀬 信子(福山平成大学)

II・13 近代以前における馮夢龍の読者とその評価

大木 康(東京大学東洋文化研究所)

司会 竹村 則行(九州大学)

II・14 明末清初江南文人の交流状況―張潮の書簡を手がかりに―

小塚 由博(大東文化大学)

(十三時三十分～十四時)

司会 竹村 則行(九州大学)

第三会場（Ⅱ文学・語学部会、Ⅲ日本漢文部会） 3・344 講義室

十月十二日（土）午前

Ⅱ・15 明末清初刊の小説における「鍾伯敬先生批評」本の再検討

（十時～十時三十分）

岩崎 華奈子（九州大学大学院）

司会 上田 望（金沢大学）

Ⅱ・16 清末の小説における“鴛鴦蝴蝶派”の萌芽について

— 『月月小説』『小説林』に関する一考察 —

（十時三十分～十一時）

白須 留美（仏教大学大学院）

司会 藤井 省三（東京大学）

Ⅱ・17 魯迅南下前史“性と生”の軌跡を探る——「長明灯」から

「孤独者」、「傷逝」へ（十一時～十一時三十分）

湯山 トミ子（成蹊大学）

司会 藤井 省三（東京大学）

Ⅱ・18 民国初期における琴楽振興活動——周慶雲を中心とする

交友関係を手がかりに（十一時三十分～十二時）

石井 理（早稲田大学坪内博士記念演劇博物館）

司会 山寺 三知（國學院大学）

十月十二日（土）午後

Ⅲ・1 『菅家後集』「慰少男女。」論（十三時三十分～十四時）

佐藤 信一（白百合女子大学）

司会 宇野 直人（共立女子大学）

Ⅲ・2 塚田大峰の人間観——『聖道弃物』を中心に——

（十四時～十四時三十分）

小崎 智則（愛知教育大学非常勤講師）

司会 矢羽野 隆男（四天王寺大学）

十月十三日(日) 午前

Ⅱ・19 「八〇後」作家の郭敬明の成長とその文化集団の理念と実践

(九時三十分～十時)

張 瑤(東京大学大学院)

司会 白水 紀子(横浜国立大学)

Ⅱ・20 「八〇後」作品における同時代中国の青年像

〈韓寒著『1988〜この世界と話したい』

(2010年刊行)を中心に(十時～十時三十分)

楊 冠穹(東京大学大学院)

司会 白水 紀子(横浜国立大学)

Ⅱ・21 中国における村上春樹「中国行きのスロウ・ボート」の受容

―人気書き込みサイト「豆瓣網」読者ユ―ザーとの対話―

徐 子怡(東京大学大学院)

司会 白井 重範(國學院大学)

Ⅲ・3 『漢書抄』 「帝紀」における全相平話『前漢書統集』の

抄写について(十一時～十一時三十分)

菅原 尚樹(東北大学専門研究員)

司会 長尾 直茂(上智大学)

Ⅲ・4 林羅山における日本神国観―朱子学理気論との

かわりをめぐる―(十一時三十分～十二時)

韋 佳(広島大学大学院)

司会 湯浅 邦弘(大阪大学)

十月十三日(日) 午後

Ⅲ・5 長尾雨山が上海で参加した詩会について

(十三時～十三時三十分)

松村 茂樹(大妻女子大学)

司会 稲畑 耕一郎(早稲田大学)

Ⅲ・6 「道徳教育」の視点を踏まえた漢文教育―漢文教材から

生き方を考える―(十三時三十分～十四時)

秋山 恵美(御所野学院高等学校)

司会 菊地 隆雄(鶴見大学)

特別講演会 於3・145講義室（六十周年記念ホール）

1 古典文学研究の方法―陶淵明などを例にして

十月十二日（土）午後（十四時五十分～十六時二十分）

日本中国学会顧問・（公財）斯文会理事長・全日本漢詩連盟会長

石川 忠久

2 中国の政治文化について

十月十三日（日）午後（十四時五十分～十六時二十分）

元いわき明星大学学長・東北大学名誉教授・鹿角市先人顕彰館名誉館長

寺田 隆信

發表要旨

第一部份（『哲学・思想部会』）

I・1 『莊子』齊物論篇再読

溝本 章治

嘗ては老子から莊子へ、とされてきた見方も、現在ではその文献成立の前後関係については見直されてきている。また、そこに現れる個別の思想の影響関係についても見直しが求められよう。その中で、道家思想の文献としては比較的初期のものと考えられる『莊子』齊物論篇であるが、その読みの根拠はこれまでにもましてこの篇自体に求められねばならないことにならう。このように見たとき、従来の訳解は旧来の見方に依拠しているように思われ、この見方が崩れたいま、疑問に思えるところが少なくない。必要以上に抽象化されているように思われるのである。

例えば、従来の訳解には「道」を当然のごとく普遍的な道のように扱っているところがあるが、この篇に現れる道は、まずは個別的な道として考えるべきではなからうか。また、この篇においては是非の否定が説かれていることは確かであろう。しかし、この篇に現れる是非の否定の多くは彼もしくは是（これ）の是（ぜ）とする、あるいは非とする見方の否定であり、そこでは是非そのものの否定は、少なくとも読みの第一段階では、出てこないと考えるが、従来の訳解はこのことへの意識が希薄であるように思われる。発表者には、こういった勇み足が必要以上に読解を困難にしているように思われる。

今回の発表では、まず莊子の根本思想の一つである万物斉同の思想が最もよく現れているとされる『莊子』齊物論篇の「夫言非吹也、……是故滑疑之耀、聖人之所凶也、為是不用而寓諸庸、此之謂以明。」の部分の読みを問い直したい。理詰めだけではなかなか理解しがたいところのある『莊子』の中では比較的理詰めで考えられる部分であるが、様々な異った訳解が施されているところでもある。併せてそこから窺える個物重視の思想について考察したいと考えている。

I・2 戦国楚帛画の舟よりみる復活再生観念の考察

大形 徹 (大阪府立大学)

戦国楚の「龍鳳仕女図」(『中国美術全集』2 絵画)(曾布川寛氏は「人物龍鳳図」に描かれる女性は中国の人物画の嚆矢とされている。女性は仕女ではなく被葬者で、あの世への復活再生が実現するように描かれたものである。その意味でこの絵画は芸術というよりも呪術であり、そこに当時の「死生観」という「思想」を読みとることができる。この呪術的絵画の右下部分に三日月形の舟の一部がみえる。これは白描図では描かれておらず、従来、見逃されてきた。白描では消えている三日月形の一部が舟であれば、戦国楚「龍鳳仕女図」(龍十舟)↓戦国楚「人物御龍図」(龍舟)↓前漢長沙「馬王堆(三号墓・一号墓)帛画」(龍舟)(※三号墓帛画は龍4頭、一号墓帛画は龍2頭)という簡略化した図式が可能であり、龍と舟が習合して龍舟となったといえる。舟に乗って昇天という考え方には遠くエジプトの太陽の舟の考え方が影響しているかもしれない。エジプトでは太陽が三日月の舟に乗って天空を航行し、その後、地下をもぐり、再生復活すると考えた。エジプトの死者(ミイラ)もまた、その舟に同乗し、太陽とともに復活再生したのである。

墓と舟(実物や模型の副葬、図像)の関連は数多くみることができる(辻尾榮市「葬船考」)。この考え方が伝播して中国に伝わり、画像石や帛画に描かれる死生観となったのではないかという仮説を提示したい。そこに描かれる死生観は当時、儒教で規定されていたものとは大きく異なっている。そこから仙人が生み出され、神仙思想が生まれ、道教の先駆となっていくのではないか。『山海経』には、はじめに絵があり、文字はその説明と読みとれる部分がある(袁珂『山海経校注』)。思想は必ずしも文字や言葉のみによって伝わるものではなく、一見してその内容が読みとれる図像資料によって伝播していくこともあったのであろう。

I・3 戦国期における時代区分と史伝の形成と

黒田 秀教 (台湾明道大学)

伝世文献として、戦国時代に由来を持つとされている史伝は、『左傳』と『國語』とである。これに汲冢書『古本竹書紀年』の佚文などが、従来目にする事ができる歴史に関する文献であった。しかし、近年陸続と発見されている新出土資料には、従来は存在が知られていなかった、戦国時代に読まれていたであろう史書の類も豊富に含まれている。これにより、戦国時代における史伝の形成と、その背後に存在する歴史観念とについて、改めて検討することが可能となった。

そこで本論では、『左傳』『國語』や『春秋事語』、清華大学蔵戦国竹簡などを利用して、黄河中流域における歴史観念について検討していく。『清華大学蔵戦国竹簡(叁)』所収の『良臣』は、君名とともに名臣の名を列举していくという一風変わった文献であるが、そこには、①齊桓公よりも晉文公を重視していること、②孔子を「孔丘」として記述し、季氏に好意的であること、③鄭桓公によって時代区分していること、④子産を極めて重視していること、という特徴が見られる。これは『左傳』『國語』の性質とも合致するもので、こうした歴史観念が黄河中流域に存在していたことがわかる。

また、『清華簡『繫年』』に登場する紀年は周・晉・楚であり、『國語』において歴代君主の史伝が記載されているのは周・魯・晉・楚の各国語であるが、黄河下流域において活躍した孟子が挙げる各国「春秋」も晉・楚・魯である。つまり、黄河中流域のみならず、黄河下流域においても、晉楚を中心として語る歴史観念が存在していたことがうかがえる。

こうした戦国時代における歴史観念をもとに、戦国時代における時代区分の概念と、史伝の形成と展開とについて、検討していきたい。

隋・蕭吉撰『五行大義』の記述のうちには、南北朝期の義疏に類似した箇所がしばしば見られる。そこで、この書物を義疏学の所産であると仮定し、本文の読解を試みたところ、新たに文体上の特徴がいくつか得られた。それらを踏まえ、主に本文中に引かれた文献の扱われ方について述べたい。

本発表では、まず、『五行大義』と義疏との類似性について、具体例を挙げながら述べる。言うまでもなく、「経」（注を含む）と「疏」とは、解釈されるものと解釈するものとして一对の関係にある。「経」をもたない『五行大義』においても、このような関係性は同様に見ることができ、それが顕著である場合とそうでない場合とがあることを確認する。

その上で、「経」と「疏」との関係性が諸文献からの引用文にも適用しうることを述べる。『五行大義』には先秦から隋代に至るまで、經史子集の幅広い書物が豊富に引かれており、多い場合には一篇の大半を占めることもある。蕭吉は、それらを単に羅列したのではなく、一定の規律にしたがい、それぞれに「経」と「疏」という役割を与えながら本書を記述した。その際の諸文献に対する等級づけからは、撰者の見識の一端をうかがうことができる。

以上のことから、『五行大義』が義疏学を基礎としていることを改めて確認する。また、それを前提とした読解が本文の校勘、佚文の輯佚にも有益であり、何より義疏学研究の恰好の資料となりうることを付言して結びとしたい。

I・5 「正書」、「正字」を手がかりとした写本時代の書物作成過程をめぐる一考察 村田 みお（京都大学非常勤講師）

魏晉南北朝隋唐時代とは、書物の形態から言えば写本時代に当たると言える。後の版本時代の場合には、書物の作成過程において、版木に彫って印刷するという大きな転換点がある。では、全てが手書きであった写本時代には、そのような転換点は存在しなかったのだろうか。また、下書きや増補・修訂版、定本、底本といった作成上の様々な段階は、当時の人々には何ら意識されていなかったのだろうか。

このような問題を考える際には、翻訳や写経、注釈書作成に関する具体的に詳細な記述を多く伝えている仏教文献が有用である。また、それらの中に見られる「正書」、「正字」という概念が重要な手がかりとなる。「正書」という名称は正しく規範的な書体を意味するが、ある特定の形の書体に対応するというよりも、不特定多数に流布させるための公的な書体という機能を指すものと考えられる。また「正字」は、異体字・俗字と対立する、依拠すべき標準字体を指しており、「正字」という職も設けられている。仏教文献に見出すことのできる「正書」、「正字」やそれに類する様々な例からは、もちろん仏教に特有の要素もあるが、それだけに止まらず、写本時代の書物作成全般に共通する基礎的な観念を窺い知ることができる。

そこで本発表では、仏教文献に見られる関連資料を中心的材料とし、「正書」、「正字」をキーワードとすることで、この時代の書物の作成過程が如何なるものだったのか、作成過程が当時の人々の意識の中でどのように段階づけられていたのかを考察する。

本発表は、浄覚撰『楞伽師資記』に見える各種実践法を唐代宗教思想史の中に位置づけ、該書の資料価値に再検討を加えるものである。本書『楞伽師資記』は遅くとも唐開元十一年（723）頃には成立していた後の燈史と呼ばれる禅宗史書の源流に位置する書物であるが、菩提達摩ではなく『楞伽經』の翻訳者である求那跋陀羅を第一祖に奉じており、禅宗という呼称はいまだ見えず「東山浄門」あるいは「東山法門」を自称しているなど、初期禅宗というよりはむしろ禅宗とも呼ぶべき時期の禅思想を伝える資料と言える。したがって本書の理解には後世にいわゆる禅宗の枠組みを離れ、同時代のより広い文脈において考察することが要請されるのである。たとえば、本書に述べられる初学者の坐禅法はそれに関連する「守一」「一」に関する議論も含めて、『三論元旨』などの道教文献における実践法との共通性を持つ。また本書では『文殊説般若經』にもとづく「一行三昧」を東山法門の代表的な実践とするが、このことは南北朝以来の『文殊説般若經』受容史の一齣として位置づけることが可能である。さらにこうした実践を通じて獲得された悟境をためす方法として、本書は「指事問義（事を指して義を問う）」なる問答法を伝えているが、これは同時代の禅文献『大乘無生方便門』や偽經『首楞嚴經』と同じ思潮の中で生まれた実践法として理解するべきであろう。

I・7 六朝期における道の体得と身体観

高橋 睦美（東北大学）

魏晋以降、知識人の間で五石散や寒食散と呼ばれる散薬の服用が流行したことは良く知られている。『世説新語』言語篇には「服五石散、非唯治病、亦覺神明開朗」とあり、病を治すほか精神高揚の効果が期待されていたらしいことが分かる。そうした言わば一時的な効果を期待する薬物服用以外に、不老長生の神仙になるため、金丹を錬成しようとする人々がいた。東晋の葛洪『抱朴子』は神仙となるための理論と実践を詳細に述べた書物である。そこでは、一定の手順を踏むことにより、人間は生得的な肉体の性質を神仙としてのそれに變化させ得るといふ考え方が前提になっている。

しかし一方で、神仙とは生まれつき「異氣」を受けている者だけがそうなのであって、学んで至ることのできるものではないといふ考え方も行われていた。例えば魏の嵇康「養生論」は、人間は生得的な性質を變化させることができないという立場をとる。ただし、嵇康は千年、数百年という、不死ではないものの並外れた長寿を得ることは神仙以外にも可能であるとしている。己の性命を損なわず、適切に養生を行いさえすれば本来人間はそれだけ永らえることが可能だとするのである。人間の寿命の上限をどこに設けるかといふことをひとまず措くならば、嵇康と同様の考え方はそれ以前にもある。『呂氏春秋』には「順性則聰明壽長」「得道者、生以壽長」といった記述があり、逆に心身を損なうものとして「五色」「五音」「五味」が言及され、『老子』の思想を下敷きとしていることが看取される。その点からすれば、嵇康の養生思想は『老子』以来の道家の得道の思想と、それを養生に関するものとして議論を展開した思想を襲っていると言えるのではないかと思われる。

本発表では、六朝期に至るまでの養生に関わる様々な言説について、人の身体をいかなるものとして考えているのかという点に注目して考察を行いたい。

I・8 『集注太玄経』に見える司馬光の「心」の思想

田村 有見恵（早稲田大学大学院）

『集注太玄経』とは、司馬光が称揚していた揚雄の『太玄経』に対して、三十餘年の歳月をかけて完成させた注釈書である。揚雄『太玄経』には、『易経』の六十四卦に相当する八十一首があり、『易経』の三百八十四爻に相当する七百二十九賛がある。その『太玄経』八十一首、七百二十九賛に、宋衷、陸績、范望、王涯、宋惟幹、陳漸、呉秘等の注を取捨選択した上で、司馬光自身の注釈を施し、『集注太玄経』として上梓した。また、揚雄『太玄経』は、一首のなかに九賛あるのだが、司馬光注の特色としては、「玄数」や「玄文」に依拠して、基本的にその一賛ごとを昼と夜、君子と小人に配当させて、その繰り返しで捉えていること、初一・次二・次三を「思」の始・中・終、次四・次五・次六を「福」の始・中・終、次七・次八・上九を「禍」の始・中・終で捉えていることが指摘できよう。

司馬光という歴史学者や政治家の面が目立つため、宋代の思想史のなかで司馬光の思想を中心として議論されることが少なかつたように思う。しかし、実際には范鎮、韓維、程顥、程頤、邵雍等と共に「心」に関する議論を行っていた一人である。

また、周知の通り、司馬光は北宋に於いて、孟子ではなく揚雄を顕彰しており、「孔子既に没し、聖人の道を知る者は子雲に非ずして誰か。孟と荀と殆ど擬ふるに足らず、況んや其の餘りをや」とまで述べている。つまり、孔子の次に揚雄を位置づけているのである。

本発表では、この司馬光が揚雄の『太玄経』の注に於いて、その「心」の思想をどのように述べているかを検討したい。

I・9 悲憤慷慨の系譜―朱熹『楚辭後語』にみる継承と展開

田宮 昌子（宮崎公立大学）

士大夫、読書人、知識分子：時代或いは指示範囲の違いにより呼称は異なるものの、これらの人々には共通項がある。彼らは文盲率が歴史的に高かった中国において、高度な人文的教養を身につけた少数の人々であり、中国文化の形成を担ってきた人々である。彼らは儒学に表われているように積極的に社会に関わり、自己の才を発揮することに人生の意義を置いた。道家的な「出世」はあくまで前者が叶わない時の二次的選択肢である。このように「入世」を志向する彼らには、挫折や受難がつきまとう。かくして、失意の男子が己の志をうたう「悲憤慷慨」の情が生まれる。この「悲憤慷慨」の情は有史以来様々な形式の「文」の中に書き留められており、長い歴史的経緯の中でそれを以って記される事例を蓄積しつつ系譜化してきた。本研究はこの「悲憤慷慨」の系譜を楚辭の伝承（その享受、注釈、新作品の創作）を切り口に考察しようとする。

発表者は、既に後漢王逸『楚辭章句』において、楚辭伝承に決定的な影響をもった「離騷」篇の「注文」を戦国末から後漢に至る「離騷」理解を示すテクストとして読解し、メインテーマ「登用」、派生テーマ「忠佞の対立」「不遇」「孤高」「清潔」を見出し、「離騷」テーマと名付けた。そして、「離騷」テーマを展開する特徴的語彙を選び出し、それらの出例傾向を分析することによって意識や価値観といった抽象的対象を可視化することを試みた。結果として、『楚辭章句』に収録された諸篇の中でも「離騷」テーマに強く反応する「入世」的な意味世界を持つ系列と、殆ど反応しない非「入世」的な系列の別があること、前者の中にもメインテーマ、派生テーマの別で各篇に展開の違いがあること、「離騷」テーマ内部の諸テーマに成立時期の違いがあるらしいことが見えてきた。今回の発表では、次いで南宋朱熹『楚辭後語』について作業を行い、いかなる継承と展開を見せるかを発表した。

I・10 儒医朱丹溪の情志三鬱説の原型について

黄 崇修（台湾東呉大学）

朱丹溪は『素問』以来の気鬱説を継承しながら、それに相火の概念を組み合わせることで、鬱の発症原理を巧みに説明した。しかし、それだけでは、朱丹溪が鬱問題を専論した第一人者であることを、十分理解することはできない。つまり気脈や臓器といった「気の鬱」の他に、「心の鬱」についても、朱丹溪は断片的に言説を残したが、しかし、朱丹溪自身はそれらの考えを整理して、一個の理論体系としてまとめられることはしなかった。そこで、筆者は、張介賓が主張した憂鬱・怒鬱・思鬱といった情志三鬱説を手掛かりとして、そこから遡って分析作業を行い、併せて、『格致餘論』や『丹溪医按』の治療記録も整理した。その結果、憂鬱・怒鬱・思鬱などの概念がすでに朱丹溪に注目され、後にまとめられた理論の基盤をなしていたことが判明した。これら憂鬱・怒鬱・思鬱の特徴はそれぞれ異なり、また二つの症状を併発するケースもある。中国元代の女性の立場を例にすれば、「憂鬱」というのは、生活は裕福だが、夫が優秀で交際が多いなどといった原因により、夫の浮気を心配することによって罹ることが多い病気である。「怒鬱」というのは、主に家族とのコミュニケーションがうまくいかないなどの結果、憂鬱の気分を抱えて怒りがちとなる病気である。「思鬱」というのは、夫が単身赴任などで長期間に渡って不在となり、その離別に苦しみ、食欲を失い、沈んだ気分のまま日々を過ごすことになる病気を指す。以上の問題に対して、かつて歐陽脩は憂鬱を治療するために音楽療法を主張したが、朱丹溪はそれに加えて、怒鬱を治める文学療法、思鬱を治める心理療法を提唱した。これらの事柄から考えれば、東洋医学に於ける鬱病治療史を研究する場合は、張介賓だけではなく朱丹溪の論理も扱わなければならない。

I・11 『悟真篇』翁葆光注成書考

江波戸 互（早稲田大学大学院）

最も代表的な『悟真篇』注釈である『悟真篇註疏』は、南宋・翁葆光の注と元・戴起宗の疏から成っている。注解者である翁葆光については、「無名子・象川翁という号を持つ」、「世に巡回している薛道光注は、実際には翁葆光によるものである」という見解が、現在では主流である。このような翁葆光像を確立したのは、『悟真篇註疏』において翁葆光注を疏解した、戴起宗その人であった。

具体的に言うと、『悟真篇三註』には、『悟真篇註疏』の翁葆光注とほぼ同文の注解が、「（薛）道光注」として載せられている。また、『修真十書』所収の『悟真篇』には、「無名子注」と「象川翁注」という異なる注解が併記されており、明らかにそれぞれ別人の注として扱われている。このような混乱した状況に際し、戴起宗は、「無名子・象川翁はいずれも翁葆光の号であり、また「道光」とは「葆光」の誤写である」と強く主張した。こうして戴起宗は、無名子・象川翁・薛道光という三人の『悟真篇』注釈者を、全て翁葆光という一人の人物に統合し、現在の翁葆光像を確立したのである。その結果、『道蔵』所収の五種の『悟真篇』注釈のうち、実に四種が翁葆光注を収めているという状況が生じた。そして戴起宗の言説はこのように非常に大胆かつ影響力が大きかったにも関わらず、これまで殆ど疑義を呈されることなく受け入れられ、現在に至っているのである。

しかし発表者は、戴起宗説にはいくつかの不審な点があり首肯しがたいと考える。そこで本発表では、南宋から元にかけての各種『悟真篇』注釈にテキスト・思想の両面から分析を加えることで、戴起宗説の是非を検証し、翁葆光という人物の実像と翁葆光注成書の過程を探ることとする。さらにこの作業を通じて、従来不明であった各種『悟真篇』注釈の先後関係についても、その解明を試みる。

1・12 張居正『孟子』解釈とヨーロッパにおける受容について

佐藤 麻衣 (筑波大学大学院)

本研究は、十六世紀から十八世紀にかけて、特に清代におけるイエズス会士によってヨーロッパ社会に強い影響をもたらした中国文化の伝達に着目し、その社会思潮の中で『孟子』の思想がどのように受容され、その役割を果たしたのかを考察することを目的とする。

たとえば孟子の政治思想に革命論があるが、仁義の徳を失った君主を「放伐」してもよいという「革命」の正当化は、絶対王政が常識とされていた当時のヨーロッパに対し、中国文化をヨーロッパに伝えていた十六世紀におけるイエズス会士にとっては敬遠される思想であった。しかし、イエズス会士のフランソワ・ノエル（一六五〇―一七二九）によって『孟子』はラテン語に翻訳され、『孟子』を含む「四書」の完訳が初めてヨーロッパに紹介されることとなる。また、ここで重要な点は、ノエルを含めそれに先立つ宣教師たちが「四書」を解釈する際、張居正（一五二五―一五八二）の注釈に依拠する部分が非常に大きかったことである。

万暦元年（一五七三）に内閣の首輔（首席大学士）となった張居正の著に、『四書直解』というものがある。万暦帝（一五六三―一六二〇）に進講する際の教科書とされた『四書直解』の内容は、主に朱子『四書章句集注』の解説ではあるが、朱子の説に依拠しつつも張居正自身の考えを挿入しており、また宋明理学の影響が反映されてもいる。よって、『四書直解』を主な資料とする研究は、張居正自身の思想を新たに実証できると同時に、ノエル著『中華帝国の六古典』において、対応するノエルの『孟子』解釈も考察することにより、ノエルによる張居正を通じた『孟子』受容を明らかにできるのである。

以上を踏まえた上で、本研究では、張居正による『孟子』解釈とそこに展開する孟子の主要思想がヨーロッパにおいてどのような受容されたのか、ノエルによる『孟子』解釈を通してヨーロッパに受容されたことの意義を究明していくものである。

袁枚（1716-1797）は、清代乾隆・嘉慶年間を代表する詩人でありながら、その文集などには思想的な発言も多く残していることから、文学史のみならず思想史の面からも注目されてきた人物である。同時代における学問との関連から見た場合、考拠学に対しては批判的な立場を取っており、たとえば「呉派」の領袖として知られる惠棟（1697-1758）が経学に取り組むよう勧めてくると、かえって惠棟の学問を批判している（『小倉山房文集』巻18「答惠定宇書」）。ただ、袁枚は学問や経学そのものを否定していた訳ではなかった。従来の研究でも指摘されているように、袁枚の学問観には程廷祚（1691-1767）の学問への共感があり（郭紹虞、野田善弘、濱口富士雄氏ら）、このことを惠棟批判と関連づけて見るならば、袁枚は経書そのものを追求するのではなく、経書に記された聖人の心を捉えることに重点を置いていたと考えられる。そもそも、こうした発想は、「蓋詩境甚寛、诗情甚活、総在乎好学深思、心知其意、以不失孔孟論詩之旨而已。必欲繁其例、狹其徑、苛其条規、桎梏其性靈、使無生人之樂、不已慎乎」（『隨園詩話補遺』巻03第04条）とあるように、袁枚が主に詩文論の中で主張する「性靈」によって支えられていたことは想像に難くない。ただ、一方で袁枚は考拠に対して詩文を重視する理由を述べるに際して、「論語曰、「古之学者為己、今之学者為人。」著作家自抒所得、近乎為己。考拠家代人弁析、近乎為人」（『小倉山房文集』巻30「与程戴園書」）とも語っているように、袁枚にとつては経書を解釈することだけでなく、自らの「性靈」を詩文に著していくことも、聖人の教えを追及することの一部として位置づけようとしていた。本報告では、袁枚の考拠学批判の背景にある、このような「性靈」説の特徴を明らかにし、袁枚がどのような学問観を抱いていたのかを探っていくことにしたい。

清末民国初期の劉師培は家学を継承して『左伝』を自身の春秋学を中心に据えた。清代に於ける左伝学は主として訓詁考証学を研究対象とするものであったが、劉師培の研究姿勢はそれとは異なる要素を有していた。それは『左伝』の義例の研究を通じて夫子の微言大義を究明しようとした点である。現在『劉申叔先生遺書』に収録されている劉師培の『左伝』に関する著作は九種あるが、『春秋古経旧注疏証』を除いて全て義例に関するものである。このうちの『読左筭記』（1905）は、杜預の「周公礼経」説を批判して漢儒の「丘明作凡例」説に改めて着目し、『左伝』の凡例研究を、当時盛んであった事・礼の研究、即ち『左伝』の記載による春秋戦国時代の歴史事実の研究と礼制の研究と並んで重要なものとみなした。その後、さらに1909年から1916年にかけて、劉師培は『左伝』に於ける義例の研究を進め、『春秋古経箋』、『春秋左氏伝時日古例考』、『春秋左氏伝古例詮微』、『春秋左氏伝例略』などの義例観を表す代表的な著作を残した。特に『古例詮微』（1912）は、先儒の義例説を整理・修正しながら、独自の『左伝』の義例体系を築くに至ったものであり、劉氏の義例観の概要を最もまとまった形で見出すことができる。これらの著作を通じて、劉師培の『左伝』に関する研究が、主に『左伝』の凡例や書法、またそこから読み取ることのできる微言を重視し、それを体系化することを中心的課題に据えていることがわかるのである。

思想史上において、『左伝』の義例を体系化させたのは、西晋の杜預であるが、劉師培の左伝学の特徴の一つは、杜預の築いた義例の体系性を否定した上で、漢儒の説を用いて新たな体系を再構築しようとしたことにあると思われる。本発表は、『古例詮微』を中心に他の著作を参照しつつ考察し、さらに杜預との比較を通して、劉氏の義例観を、(1)経・伝の性質、特に経と伝との関係についての見解、(2)義例の整理・修正による『左伝』の「凡例」の体系化、の二点から明らかにする。

Ⅱ・1 「日書」中の「巫」と「狂」との関係について

高戸 聰（東北大学）

「日書」とは、誕生日や誕生月からその子の将来を占ったり、建物や門等の配置の吉凶を判定したり、ある日に物が紛失するなら盗人はどういう者であるかなど、各種の占いが記された書物である。この「日書」は、1975年に湖北省雲夢縣睡虎地で「日書」と標題のある秦簡が発掘されて以降、今日に至るまで各地で陸続と同種の竹簡が出土している。

さて、睡虎地秦簡・放馬灘秦簡・随州孔家坡漢墓漢牘のそれぞれの「日書」の中には、「巫と為る」という占いの言葉が散見される。この記述は、ある日その占いに該当する女子や妻が巫になるだろう、ということであると思われる。

ところで、伝世文献である『国語』楚語では、「明神」が降ること、「巫」や「覘」になる場合と、家々で勝手に「巫史を為す」場合とが記されている。「巫」となる際のこの二通りの場合について、前者については、六朝志怪に、ある女が「神」に出会うなどの神秘的な体験を経ることで、「巫」になる話を見出すことができる。また後者については、『塩鉄論』や『潜夫論』に、当時の民が本業を疎かにして巫事を学び庶民を欺くとされることを、見出すことができる。

それでは、「日書」に散見される「巫と為る」とは、どのように考えるべきなのだろうか。上記の各「日書」には、この「巫と為る」と「狂」との関係を示唆すると思われる記述が見られる。「巫」と「狂」との関係は、『漢書』で「蒯通」が「陽狂して巫と為」ったとされているように、伝世文献でも見いだすことが出来る。

本発表では、以上のように「日書」に見える「巫」の語を手がかりに、「巫」と「狂」との関係について考察していきたい。

浜村 良久(防衛大学校)
水野 實(防衛大学校)

『詩經』國風の題名はいずれも詩の第一章の一部を抜き出したもので、一五三篇は第一句から、七篇は第二句、第五句から取られている。本発表では國風の題名の構造分析を行い、題名の元になった句(元句)から題名を抜き出すパターン(題名型)について、詩の構造、歌謡型、疊語、地域差などと関連づけて考察し、國風の題名規則を明らかにしたい。

國風の題名型は基本型六種類(冒頭型、中央型、末尾型、全体型、一三型、二四型)と、元句に疊語を含むため複数の題名型に分類できる詩四種類の計十種類に分類できる。第一章の歌謡型がB B B B型、B B A B型の詩には冒頭型の題名が多く、A B A B型の詩には末尾型・全体型の題名が多い。これは詩の構造の違いを反映していると思われる。

- ① 同じ国に第一章第一句が同一の詩がある場合、必ず二つの詩の題名型を変えて同名を避けるが、国が違えば必ず同じ題名にする(九篇)。
 - ② 同じ国に第一章第一句が似た詩がある場合、國風前半(周南、邶風)と國風後半(王風)で異なる題名規則に従い、同名を避けた題名をつける。しかし、国が違えば同じ題名をつける。両方にまたがる場合は同名を避けて全体型の題名にする(二五篇)。
 - ③ 句に二字反復の疊語を持つ詩(邶風「式微」など)は必ず反復語を題名とする(六篇)。
 - ④ 全体型三六篇の題名の八九%が「之」「有」「其」「于」「彼」「曰」「何」の何れかを含むのに対し、全体型以外一二四篇の題名でこれらを含むものは二%しかない。
 - ⑤ 他の詩では、概ね一定の優先順位に従い、題名から除外される特定の語(疊語、置き字など)を含まない題名型を取る。
- 以上の題名規則の考察から、題名の起源や各国、各歌謡型の詩の構造の違いなどについて考えていきたい。

II・3 西晋武帝期における文人の著述活動とその立場―左思「魏都賦」の分析を中心に― 栗山 雅央（九州大学大学院）

西晋文学研究は、主に陸機や潘岳、及び彼らが属した文学集団に対する考察や、魏晋玄学と表現技法との関連から考察がなされてきた。加えて発表者は、王朝交替期である武帝期の著述活動に着目することで、新たな視座が獲得できると考える。その際、左思の長篇傑作「三都賦」は格好の考察材料となる。

従来、「三都賦」は序文を中心に考察され、個別分析は殆どされなかった。しかし、「三都賦」はそれぞれ固有の特徴を持ち、「蜀都賦」「吳都賦」は当地の風俗物産を仔細に説明し、「魏都賦」は後漢末から曹魏滅亡までの歴史叙述に重点を置く。これは当時の社会情勢と密接に関係し、前者は当地の地理的状況の把握のため、後者は西晋王朝建国に伴いその正統性を主張するためである。かかる個別分析に基づく考察により、「三都賦」の著述動機や文学史的位置付けも明確化できるように思われる。

ところで、「魏都賦」に描かれる魏都は鄴都であるが、曹魏王朝の帝都は洛陽であり、鄴都は魏王曹操の都であるため、史実と齟齬が生じる。従来、この点は全く考慮されなかった。左思が敢えて鄴都を選択した要因としては、三国末から六朝初期にかけての文人意識や、著述時期に未だ司馬氏の洛陽での権力篡奪が容易に想起され、洛陽を対象とした直筆が困難であった点に求められる。かかる不安定な時期であるが故に「魏都賦」で王朝の正統性を主張する必要性が生じ、それは陳寿の『三国志』や杜預の『春秋左氏経伝集解』など左思と同時期に西晋王朝に属した文人の作品にも同様に認められ、ここに西晋武帝期の著述活動の特徴の一つが見出せよう。

本発表では、「魏都賦」における鄴都選択の要因に関する分析を通して、まず左思の著述動機を明らかにし、併せて、陳寿や杜預ら西晋武帝期の文人たちの著述活動を更に具体化させたい。

II・4 阿倍仲麻呂歌の月と杜甫「月夜」詩の月について

増野 弘幸（大妻女子大学）

阿倍仲麻呂と杜甫とは同時代を生きたが、その二人が月についてほぼ同時期に作品を残し、仲麻呂歌の四年後に杜甫の「月夜」が作られている。そのいずれもが「月を介して」妻や故国を想う表現を行っている。杜甫はこの詩を境に、題に「月」を入れた詩を作る様になり、内容的にもそれ以前が単なる背景だったものが深く内容と関わるものへと扱いが変化してゆく。

「月夜」は「共有される月」の表現の一つだが、こうした用例は六朝期では少数だが唐代には増加する。その中で「月夜」の様に月を介して人や故郷を想う表現は陳の徐陵に例が見られ、その後二百年あつて「月夜」で杜甫が用い、その後は李白、白居易に用例が見られ、白居易はその表現で劉禹錫らと応酬も行っている。

こうした月の用例が唐代に増えた背景として、一つは翫月の風の興隆が考えられる。翫月の詩は六朝期には少ないが、唐代では『全唐詩』中五十九例見られ、宋の朱弁も指摘する様に特に開元以降に多く見られる。また、拜月の風も開元以後に高まつてゆく。「月夜」はその様な月への関心が高まり始めた時代の作品であり、杜甫はそれ以降、月を詩題に入れたり、月に表現の重きを置いた点からも、こうした時代の風潮に影響を受けた作と考えて良いと思われる。

こうした風潮の中、阿倍仲麻呂の和歌は「月夜」の四年前に作られている。月を介して想う表現は唐詩の世界では杜甫が先駆けだが、仲麻呂はそれ以前に和歌でこの表現を行っている。これも、当時の月への関心の高まりの影響を受けてのものであると言えるであろう。さらに、仲麻呂歌の月は故郷の月であると共に、過去の出立の時の月でもある。唐詩にも過去と現在、人は変わるが月は変わらないという表現の詩はあるが、月を介して故郷を想う表現と組み合わせた詩は仲麻呂歌以前には見当たらない。こうした点から仲麻呂歌は内容的に唐詩の傾向を反映した先駆的かつ独創的なものであったと言える。

II・5 『白氏六帖』と白居易の文

大瀧 貴之（鹿児島大学）

白居易撰と目される類書『白氏六帖』を白居易詩の解説に利用した論考、またはその可能性や必要性に言及する論考が、従来、幾つか発表されてきた。花房英樹「白氏六帖に就いて」、『漢文学紀要』第三冊、広島文理科大学漢文学会、一九四九年）、津田潔「新樂府と白氏六帖（稿）上」、『漢文学会会報』第二十八輯、国学院大学漢文学会、一九八二年）、山崎誠「白氏六帖考」、『白居易研究年報』第二号、勉誠社、一九九三年）は、その代表である。実に興味深く有意義な事例研究、研究手法の提案がなされた一方で、その進展を難しくしてきた最大の要因に、現存する『白氏六帖』諸本が、どれだけ白居易原撰の姿を留めているのか容易には解明し得ないというテキスト上の問題がある。

発表者は、拙論「伝世過程における白氏六帖の部立て増修―『藝文類聚』『初学記』による山部門目の増修を中心として―」（『白居易研究年報』第十二号、勉誠出版、二〇一一年）において、現存する『白氏六帖』に、『藝文類聚』や『初学記』から後世に補入された部立てがあることを考察した。所論の手法で判別可能な増補部分を解明し、『白氏六帖』の原型考察の一助とする作業は、継続して進行中である。

他方、岡村繁『白氏六帖』に見える白居易自身の文」（『新釈漢文大系』季報No.111、明治書院、二〇一一年）に導かれ調査を行なう中で、更にいくつか白居易の片言隻句を見出すとともに、それらが詩ではなく文に偏り、また収載される部立てとその収録文献にも特徴的な偏りが存在することを確認し得た。本発表では、これらの偏りが白居易原撰の『白氏六帖』を考える上で重要な意味を持つ可能性について論じ、『白氏六帖』の原型考察における更なる視座の獲得を模索したい。

II・6 韓愈「石鼎聯句詩序」に見られる自己表現の特徴

山内 良太（大東文化大学大学院）

「石鼎聯句詩序」は、「軒轅弥明」という謎の道士と、劉師服・侯喜という韓愈の友人らが「石鼎」について詠んだ「石鼎聯句詩」に韓愈が付した序文である。そこには聯句が制作された状況が記されている。『太平広記』が引く『仙伝拾遺』に「軒轅弥明」という題で収められていることから分かるように、その内容は極めて小説的である。元和七年十二月四日、軒轅弥明という衡山の道士が、旧来の友人である劉師服を訪ねた。そこに居合わせた侯喜に無視された弥明は、三人で石鼎を題に聯句を作ること提案する。劉師服と侯喜は、最初こそ弥明を見くびっていたものの、ほどなくして圧倒され、やがて降参する。弥明は残りの八句を一人で作って聯句を完成させ、弟子入りを希望する二人を無視して眠ってしまう。翌朝、二人が目覚めたとき弥明はすでにいなかった。このような話を二人から聞いた韓愈は、その顛末を書いて聯句の序文とした。

「石鼎聯句詩序」を読む上で古来より問題とされてきたのは、「軒轅弥明」は韓愈なのか否かということである。最も有力な説は、朱熹も支持した、軒轅弥明は韓愈が自身を喩えたものである、というものであるが、そうであるならば、次のような疑問が生ずる。それは、韓愈が自らを軒轅弥明という謎の道士として描いたのはなぜか、我々はそこからどのような韓愈像読み取ることができるのか、というものである。

本発表では、このような問題を、韓愈は他の作品で自身をどのように描いているのか、という文脈のなかで考えてみたい。具体的には、「石鼎聯句詩序」を、韓愈が自身を作中人物として描き出した作品「剝啄行」「送窮文」「滄吏」などと比較することによって、軒轅弥明の描かれ方の特徴を明らかにし、それを踏まえた上で、「石鼎聯句詩序」に認められる韓愈自身の自己認識、自己表現の特徴を探りたいということである。

II・7 『祖堂集』における程度副詞について

竹田 治美（奈良産業大学）

『祖堂集』は現存の最古の禅宗史総集である。五代十国の南唐の静・均の二人の禅僧によつて広順2年（952年）に編集された。『祖堂集』は中国国内で編集されたものの、入蔵されず、高麗に持ち込まれ、淳祐5年（1245年）に高麗大藏經の附録として刊行されたものである。20世紀初頭に発見されるまでその存在さえ知られていなかった。

本発表は、『祖堂集』における程度副詞に焦点を合わせ分析したものである。『祖堂集』は主に白話体と文言体が併用されており、雅言・俗語や方言、官話なども多く記録されている。『祖堂集』は晩唐・五代口語の第一次資料として当時の言語状況を反映できる貴重な禅宗史書である。

副詞は漢語語彙史からみて時代とともに変化した。副詞の発展過程や特徴、機能を明らかにすることは、漢語史の研究に大いに役に立つものである。周知の通り、中古から近古にわたつて文言文から停滞へむかう過渡期であり、近代漢語の重要な段階である。この時期において、語彙は単音節から複音節または多音節に変遷し、語法用法も複雑になり、表現方法も豊かになった。

現代漢語の副詞は、主に形容詞を修飾することが一般的であり、動詞を修飾するさい、多くの制限があるのが特徴である。また、助動詞や心理的な活動を示す動詞など特定の動詞構造形式などしか修飾できない。『祖堂集』の程度副詞は、基本的動詞構造形式を修飾することができる。また一部の副詞が述語のNPになる例があり、文中での位置は述語の中での柔軟な用法も見られる。

本発表は、程度副詞の基本概念と機能を基準として分類し、また基本的な性能を重視して用法、特徴を考察する。さらに中古から近古にわたつて程度副詞の体系そのものがどのように変遷したのか、また歴史的にどのように構築されていたかに考察する。

II・8 蘇軾「江神子」詞諸篇の受容と評價について

池田 智幸（立命館大学非常勤講師）

蘇軾（一〇三六―一一〇一）は宋词の發展に大きく寄與した人物であり、その作品は今なお愛讀される。劉尊明・王兆鵬『唐宋詞的定量分析』（北京大學出版社、二〇一二年）は定量分析（宋以來の代表的な選本・詞譜における収録數、歴代の評語數、研究者の論著數、などの結果を數値化する手法）により宋词の名篇三百首を選定した。蘇詞は辛棄疾と同じく二十三首が選ばれ、四十首が選出された周邦彦に次ぐ地位を占める。この結果は、現在に至るまで蘇軾が重要な詞家として認められてきたことを示す一つの好例だろう。

ただ、今日において佳篇と評される蘇詞の全てが、宋代以降一貫して高い知名度があつた譯ではない。例えば、「密州出獵」の詞序がある「江神子」詞は、二十世紀に入るまで名作として評價されることはまづなかつた。ところが、一九五〇年代を境に當該作品の評價及び受容の状態は劇的に變化した。發表者は「蘇軾『江神子（密州出獵）』詞の受容と評價について―二十世紀中葉の中國詞學に見出だされた『豪放』詞」において、その原因について詳述したことがある（『學林』五十五號、中國藝文研究會、二〇一二年、に所収。以下「前稿」と記す）。本發表は前稿に引き續き、蘇軾「江神子」詞諸篇における評價と受容が如何に變遷してきたかを考察するものである。

發表者が特に注目するのは、「十年生死兩茫茫」を初句とする作品である。この作品は現在でこそ亡妻・王弗を詠んだ悼亡詞として人口に膾炙するが、二十世紀に入るまでは殆ど知られなかつた一首である。本發表では、「江神子・十年生死兩茫茫」詞の評價が急激に進んだ原因を中心に論じ、前稿の分析結果と併せて「江神子」詞諸篇の受容の變遷にも言及する。その上で、蘇詞受容の問題、ひいては詞學史に關連する問題についても検討を加えてみたい。

II・9 『梧桐雨』雑劇の晩秋の季節

櫻木 陽子（龍谷大学非常勤講師）

白仁甫（白樸）『唐明皇秋夜梧桐雨』（『梧桐雨』）雑劇は、唐明皇（玄宗）と楊貴妃の物語を描く元雑劇の代表的な作品である。

この『梧桐雨』雑劇と題材を同じくする、元代の諸宮調作品に、王伯成『天宝遺事諸宮調』がある。『梧桐雨』雑劇と『天宝遺事諸宮調』は従来からその関連性を指摘されてはいるが、まだ十分な研究がなされているとは言いがたい。本発表では、『梧桐雨』雑劇に描かれる晩秋の季節に着目して、この両者の関連を中心に論じていきたい。

史書には、楊貴妃が馬嵬坡で自害したのは天宝十五載の六月とあるが、『梧桐雨』雑劇では、馬嵬坡の場面を描く第三折は、夏の六月ではなく、晩秋の出来事として描かれている。また安祿山の乱の知らせを聞いて、玄宗が蜀に逃げることを決める第二折や、乱平定後に宮殿で余生を過ごす玄宗が、楊貴妃を夢に見る第四折にも、晩秋の季節が描かれている。

一方、『天宝遺事諸宮調』の馬嵬坡の物語を描く套数にも、『梧桐雨』雑劇と同じ晩秋の、しかも同じ夕方の時間が描かれ、その表現にも類似点が見られる。つまり元代前期の作家である白仁甫と王伯成の作品で、馬嵬坡の場面はいずれも史実と異なる晩秋の季節で描かれているのである。

このような季節の改編の原因には、玄宗と楊貴妃との死別の物語の季節として、史実の真夏の季節を優先するよりも、晩秋のうら寂しい季節で描くことが、よりふさわしいと認識されていたことが考えられる。これには、男女の別れを晩秋の季節で描いた、金代の『董解元西廂記諸宮調』の影響も考えられる。『天宝遺事諸宮調』は作品全体で、この『董西廂』の季節描写を更に発展させた描き方を用いている。本発表ではこれらの作品の季節描写の共通点を指摘しながら、その原因や背景を考察していきたい。

II・10 桃源瑞仙『史記抄』における『古今韻会举要』受容について

大島 絵莉香（名古屋大学大学院）

本研究は日本室町期に成立した、桃源瑞仙（一四三〇—一四八九）抄・講『史記抄』を対象とする。『史記抄』における『古今韻会举要』（元・黄公紹編輯、元・熊仲举要。大徳元年（一二九七）以前に成書。本邦にも五山版あり。）引用の存在については、芳賀幸四郎氏（『中世禅林における学問および文学に関する研究』一九五六年）によって、すでにいくらかの指摘があるが、引用内容については未検討である。今回、発表者が該書における引用文を調査したところ、『古今韻会举要』に拠ると考えられる箇所が多数見つかった。引用箇所の書き出しには『韻会举要』、あるいは『韻書』等と記される例があつたが、書名が記されなのまま『古今韻会举要』を引用している例も見つかった。一方で当時の禅林で流通していたと考えられ、かつ『古今韻会举要』と類似の韻書である『礼部韻略』・『韻府群玉』・『洪武正韻』等を比較対象として検証したところ、反切の違いや情報量の豊富さからも、『史記抄』の該当箇所における韻書引用については『古今韻会举要』に依拠する可能性が高いと見られる。

本研究では、本来韻書とされる『古今韻会举要』が日本の中世禅林でいかに受容されたのか、主に『史記抄』中の引用例を挙げて明らかにしたい。

II・11 『円機活法』に見える四庫全書未収の詩について

高芝 麻子（横浜国立大学）

『円機活法』とは詩を作る際の参考書として明代に編集、出版された書籍である。ことに日本での影響は大きく、明治時代に至るまで和刻本が繰り返し出版され続けている。この書籍には、四庫全書などに見いだせない詩文が数多く収録されており、詩題や作者名が明らかでない作品が非常に多い。また、作者名を明記されているものの中にも、実際にはその詩人の作品ではないことが少なくない。例えば、巻一「歩月」項に採録された杜甫の詩とされる四句からなる詩は、現存する資料から確認する限り、蘇軾の詩にみえる句であり、しかも前半二句と後半二句をそれぞれ別の作品から取っている。また、巻二十「紅梅」項に採録された王安石の詩は現存する王安石の別集には見いだせない。これらのケースは多くの場合『円機活法』の誤りと見なすのが妥当である。しかし、すでに高橋宏氏、仁枝忠氏らが浄瑠璃や俳諧、江戸漢詩との関わりを指摘されているように、『円機活法』は国文学の領域に広範な影響を与えている。さらには新井白石の若き日の漢詩集『陶情詩集』には、前述の『円機活法』巻二十「紅梅」項の王安石詩を踏まえた作が見いだせるのだが、『陶情詩集』には『円機活法』の影響が端々に見える。すなわち、白石は『円機活法』を参照し、「紅梅」項の詩を王安石の作品とみなした上で典故として用いた可能性が高いのである。これら国文学への影響の大きさを考えれば、『円機活法』の誤りは、単なる編集の杜撰さとしてそのまま見逃すことができない問題を含んでいると言える。また、詩人名を冠さない、あるいは無名詩人の名を冠する大量の作品も非常に興味深い存在である。本発表では主に『円機活法』の品題に収録された四庫全書未収の詩について検討し、この書籍の性質の一端を明らかにしたいと考えている。

II・12 松江「十八子社」をめぐる

上原 徳子（宮崎大学）

明代には多くの文人結社が存在した。この時代の文人結社の活動は詩の創作や科挙試験準備という目的でなされただけでなく、政治性をも帯びていた。先行研究の多くが明末の結社の状況に焦点を当てるのはその歴史的重要性からみて当然のことといえよう。では、明末清初の激動の時代から少し時間をずらし、万暦の始めの状況はどうであったのだろうか。先行研究は、その時代に存在していた文社・詩社の名は数多く挙げられてきたが、その詳しい活動状況について言及したものは多いとはいえない。

万暦初めの松江には「十八子社」といわれる集団があつたことが知られている。朱彝尊の『静志居詩話』によれば、これには唐文献、董其昌、馮夢禎らが参加していたという。また、李延昱『南吳旧話録』では、それ以外にも十名の名を挙げている。発表者は以前、万暦五年に起こった情死事件に関する論文を発表した（『万暦五年の情死事件についての一考察』松村昂編『明人とその文学』汲古書院、平成二十一年）。その際、事件の当事者がこの十八子社の構成員であつたことを明らかにしている。

松江の結社としては、明末の幾社が知られており、これについては多くの先行研究がある。本発表は、幾社成立以前の松江の文人達にどのような結びつきがあり、どのような共通の価値観を持って活動していたのかを十八子社を中心に考察することを目的とする。彼らの活動には、明確な文学的、政治的主張は認められず、どちらかといえばゆるやかなつながりしか認められないが、彼らの文学的志向をいくらかでも明らかにしたい。それを通じて、万暦前期の松江がどのような「文学の場」であつたのかを検討し、十八子社等その時代の松江の文人結社の文学史上の位置づけをするてがかりとできればと考えている。

II・13 近代以前における馮夢龍の読者とその評価

大木 康（東京大学東洋文化研究所）

二十世紀以降、明末蘇州の文人馮夢龍（一五七四～一六四六）の名は、短篇白話小説選集「三言」や蘇州の民間歌謡集『山歌』などによって、主として「明末通俗文藝の旗手」として知られてきた。それはそれでまちがいでない。では、ひるがえって近代以前において、馮夢龍の作品はどのように読まれ、評価されていたのであろうか。

読まれたという点についていえば、「三言」そのものは、中国にあつて影がうすくなり、二十世紀に入って日本で「再発見」される経緯をたどるものの、「三言」及び「兩拍」からの選集である『今古奇観』は、清一代を通じて刊行され続け、多くの読者をもつたことが知られる（『今古奇観』の序では、「三言」が墨憨齋すなわち馮夢龍の輯であることが明記される）。さらには墨憨齋主人評などと銘打った戯曲小説の多くの版本が見いだされることから、馮夢龍の名が戯曲小説の世界において、とりわけ広く認められていたことはたしかである。

しかしながら、馮夢龍は晩年地方官をつとめ、その治績をうたわれた人物でもあり、通俗文藝以外の著作についても、『麟経指月』や『春秋衡庫』など科挙の参考書は「挙業家の宗とする所」（『江南通志』人物伝、文苑）であつたといひ、また『智囊』や『情史』などの逸話集は広く読まれ（『智囊』は日本の幕末に官版として刊行されている）、さらに『甲申紀聞』など時事の書には、明清交替期とりわけ南京弘光朝の記録が保存されているところから、全祖望や趙翼らの著作にもしばしば引用されている。ここでは戯曲小説以外の著作の読者をも視野に入れ、そのかつての中国における位置づけについて考えてみたい。朱彝尊は馮夢龍を評して「文苑の滑稽」といった。「滑稽」ではあつたかもしれないが、まぎれもなく「文苑」の一員であつた、その側面を観察してみようというわけである。

II・14 明末清初江南文人の交流状況―張潮の書簡を手がかりに―

小塚 由博（大東文化大学）

明末から清初にかけて、江南地域一帯では多くの文人が活躍し、夥しい数の文学作品が出版された。また、同時代の文人たちの作品を集めた大部の叢書が数多く編纂されたこともこの時代の特徴のひとつであるが、その詳しい編集状況についてはこれまであまり研究されてこなかった。その中でも清初の文人張潮（一六五〇―一七〇九。字は山来、号は心齋居士。安徽歙県の人）は、友人・知人の小品文を多数集めた大型叢書『虞初新誌』『檀几叢書』『昭代叢書』の編者として知られている。また、彼の代表作である清言集『幽夢影』には100名以上の友人・知人たちが評語を付している。いずれにせよ、彼の作品制作には同時代の多数の文人たちの手が介在していることは言うまでもない。この時代は文人たちのネットワークが特に発達した時代であった。その状況について、具体的な様子を窺うことができるのは、張潮の書簡集『尺牘友声集』（友人・知人が張潮に贈った書簡を集めたもの。約1000通、差出人300名）と『尺牘友声偶存』（張潮が友人・知人に贈った書簡を集めたもの。455通、宛先約170名）である。そこには王士禛・高士奇・朱彝尊・閻若璩・孔尚任・冒襄・黄周星・八大山人・張竹波など当時における著名人と取り交わした書簡が多数収められている。そして、書簡の内容には作品の制作・編纂・校訂などに関わる記述が多く含まれていて、当時の江南における出版界の状況をかなり詳しく窺うことが出来る。むしろ、書簡は当事者同士しか知り得ない記述が多く、その内容解明には困難を伴うが、これが新事実発見につながる宝庫であることも間違いない。本発表ではその中から特に叢書編纂や作品制作に関わる書簡を取り上げ、その具体的な状況とそこから窺える文人交流の実態について考察してみたい。

II・15 明末清初刊の小説における「鍾伯敬先生批評」本の再検討

岩崎 華奈子（九州大学大学院）

明末は小説出版が隆盛を誇った時代である。多くの版本には著名人の名を冠した批評が附されているが、周知の通り、実際にはその名を借用しただけの仮託であることも少なくない。こうした仮託批評者として散見される人物の一人に、明末の文人鍾惺（字は伯敬、一五七四—一六二四）がいる。彼は同郷の譚元春と共に唐以前の詩を選評した『詩歸（古詩歸・唐詩歸）』を著し、一世を風靡した。「鍾惺評」あるいは「鍾惺編」等と謳う小説は複数存在するが、全て彼の名声にあやかった仮託とするのが通説である。士大夫の鍾惺がこうした小説を批評するはずはなく、また彼自身の著作中に小説への言及が無いことから考えても、その推定は妥当であろう。しかし、かくも小説とは無縁と思われる人物が、何故仮託の対象になったのだろうか。

従来の研究において、『三國志演義』『水滸伝』の鍾伯敬評は、先に刊行されていた李卓吾評の剽窃であり、しかも李卓吾評中の道学批判や独創的にすぎる解釈等が削除され、穏当で平凡なコメントに転化されたものであることが明らかになっている（中川論『三國志演義』版本の研究、白木直也「鍾伯敬批評四知館刊本の研究—水滸傳諸本の研究—」等）。これらは版本研究の観点から、李卓吾評本が鍾伯敬評本に先立つ根拠の一つとして論証されてきたもので、なぜ李卓吾の代替に鍾惺が選ばれたのか、批評態度の変化はなぜ生じたのか等、未だ解決されていない疑問が残っている。当時の出版者や読者は、鍾惺に対して如何なる人物像を抱き、小説評者と認めたのか。或いは仮託と知りつつ、鍾伯敬評を容認・歓迎したのは何故か。

本発表では、『三國志演義』『水滸伝』『封神演義』における鍾伯敬評と、鍾惺自身の著作、及び小説以外の鍾伯敬評を騙る書籍との比較により、鍾惺自身の言説と仮託批評との相違点を明らかにし、鍾惺が小説評者として選定された理由を検討したい。

II・16 清末の小説における“鴛鴦蝴蝶派”の萌芽について―『月月小説』『小説林』に関する一考察―

白須 留美（仏教大学院）

清末には、『新小説』（1902）に見てとれる「啓蒙による政治理念達成」、『繡像小説』（1903）に見てとれる「諷刺による現実を反映した社会批判」、『月月小説』（1906）に見てとれる「読者への道徳の浸透」という目的を果たす手段のために、作家達は小説自身の持つ効用を重要視した。その後、小説は『小説林』（1907）において小説の本質と美的感覚を希求する方向へと傾斜していく。こうした小説観は、民国期に入るとより盛んになる。そしてより近代的な小説の概念に沿う小説が新聞や雑誌に続々と掲載され始め、一群の作家達（後に“鴛鴦蝴蝶派”と称される）によって多数の文学期刊誌が刊行されるに至った。これは啓蒙という役割から大衆化、通俗化への変化でもあった。この変化によって、西洋から流入した思想及び小説の形式が中国固有の小説と混ざり合い新たな大衆小説を誕生させたと考えられる。この当時の、小説における大衆化は、上述の『小説林』の他、実は『月月小説』にもその兆しを認めることができる。『月月小説』『小説林』は社会小説、科学小説、偵探小説、のちの言情小説に通ずる写情小説など、多岐に亘る小説作品を掲載し、以後に起こる“鴛鴦蝴蝶派”に影響を与えた。その一方で、当時の小説を考察するに、文言と白話の文体の關係性を看過することはできない。『新小説』『繡像小説』は白話小説が大半を占めているが、『月月小説』においては、初期は文言、中期は白話、後期は文言と、若干の変動がみられ、『小説林』に至ると全体を通じて白話よりも文言が多くなる。この他、文言と白話が入り混じった小説は、どちらに分類するのか明確化するのが難しく、分類する際にはその定義を考察する必要がある。

本発表では、『月月小説』『小説林』の二誌に掲載された作品群を分析の対象として、小説観の変化と文言・白話両文体の關係性について探り、後の“鴛鴦蝴蝶派”に与えた影響を考察していく。

II・17 魯迅南下前史“性と生”の軌跡を探る——「長明灯」から「孤独者」、「傷逝」へ 湯山 トミ子（成蹊大学）

1926年8月、母魯瑞、妻朱安と暮らしてきた北京を離れ、後半生の伴侶となる許広平とともに南下した魯迅は、厦門、広州を経て、1927年10月晩年の地上海に至る。この南下の期間は、内的には婚姻、家族問題による愛と人生、社会的には教え子の謀殺を含む政治テロ3・18（1926年）、4・12（1927年）の体験があいまって、文学者としての思想が深化し、熟成される期間であった。筆者は、すでに南下をめぐる思想形成に関する論考（「愛と復讐の新伝説〈鑄劍〉…魯迅が語る“性の復権”と“生の定立”」成蹊法学65号、2007年）を提出しているが、本稿では、その前史となる魯迅の思考、思想形成の跡を1925年の作品「長明灯」（3月）、「孤独者」、「傷逝」（10月）に着目して検討しようとするものである。

魯迅の作品研究においては、作品構成、主題、人物形象、成立背景などから、系統的に、比較研究される特定の組合せがある。本報告が対象とする「長明灯」は改革という主題と狂人という人物形象から「狂人日記」（1918年）と、「孤独者」は作品意図、主題、人物形象と作者魯迅の思想的な投影から「酒楼にて」（1924年）、さらに成立時期と雑誌未発表という点で「傷逝」との組合せで考察されることが多い。本報告では、先行研究での比較考察を踏まえながら、「孤独者」、「傷逝」の考察に、新たに「長明灯」を加えて、作品に埋め込まれた魯迅の思想形成——自己規定と自己の愛情、婚姻関係に対する選択と決意の跡を読み解こうとするものである。それは、五四新文化運動期の自己の思想を乗り越え、新たな思想形成に向かう魯迅自身の五四脱却、ポスト五四の思想形成の軌跡であり、26年〜27年の南下に向かう思想的、内的準備を意味するものと解釈される。本報告の考察結果により「長明灯」、「孤独者」、「傷逝」の作品にも新たな考察視点を加えることができるものと考えられる。

II・18 民国初期における琴樂振興活動——周慶雲を中心とする交友關係を手がかりに

石井 理（早稲田大学坪内博士記念演劇博物館助手）

中国では歴代、各地の古琴愛好家によって、閑静な山谷や庭園などで古琴を演奏、鑑賞してその興趣を楽しむ集まりが行われていた。ところが、一九二〇年からその翌年にかけて立て続けに開催された怡園琴会（蘇州）、嶽雲別業琴会（北京）、晨風廬琴会（上海）は全国各地の人士が一堂に会するものであり、それまでと比べて大規模な集まりであった。この三回の琴会は、主催者が互いに深い交友關係にあり、また各会の参加者のなかには同じ人物が見えるなど、相互に連携して行われた活動であった。

その後一九三〇年代になると蘇州・上海で組織された琴社を中心に、古琴の演奏技術の継承以外にも、各地に散在していた演奏家の一覽や、古くより伝来した古琴の便覧を編纂するなど、全国的な琴樂振興を目的とした活動が従来よりも盛んに行われるようになった。これらの活動を主導したのは、主に先述した三回の琴会を通じて交流をもった人々であった。このように、一九三〇年代以降の諸々の活動が行われた大きな契機の一つには、三回の琴会の存在があつたと考えられる。

この三回の琴会を開催する上で重要な役割を果たしたのは周慶雲である。彼は清末民初に江蘇浙江一帯で実業家として財と名声を築き、文物保護や詩詞結社の組織など多様な文化活動を行った人物であるが、それまで他の実業家がほとんど関わることのなかつた古琴をめぐる活動に出資し、琴樂の振興に大きな影響を与えた。また、彼が主催者となつた晨風廬琴会は、三回の琴会の中でも最大規模の会であり、各地の古琴愛好家だけではなく、様々な分野の芸術家や人士を招待し、人々が交流を深める上で大きな役割を担った。

そこで、本発表では、民国期以降の琴樂振興活動を考える上で欠かすことのできない三回の琴会が後に行われた一連の琴樂振興活動に与えた影響について、琴会の中心的人物であつた周慶雲とその交友關係を対象として考察する。

II・19 「八〇後」作家の郭敬明の成長とその文化集団の理念と実践

張 瑤（東京大学大学院）

郭敬明（かくけいめい、1983年～）は、鄧小平の改革開放時代に成長し、外来文化や進歩思想が浸透した90年代を経て、外国との文化の混合が進みつつある2000年以降の文芸界に登場した。「八〇後」作家の彼は現代中国文芸界の縮図とも言える存在であり、彼の文学活動の研究は斯界の核心の理解につながるであろう。

本発表は、まず郭敬明の半生を草創期、転換期、発展期の三つに大別し、作風の変化と不変のテーマ（自己中心的意識、双子願望、孤独と生死観、擬似上海アイデンティティー）を考察、政治・社会的環境と80年代から現在までの中国文芸界発展が郭の作家としての成長過程と密接に関わっていることを明らかにする。

また、これまで等閑視されてきた郭敬明の創作動機における強い模倣意識やその変遷および意義、彼の異境文化の受容に焦点を当てる。具体的に言えば、草創期における王家衛（ウォン・カーウアイ）監督映画の『恋する惑星』と『天使の涙』に対する模倣的創造、中国第二次村上ブームにおける多重な村上春樹受容の経路、岩井俊二の映画『リリイ・シュシュのすべて』の中国語字幕の鑑賞経験とその後の同作の中国語版編集刊行という二重の受容形態を検討する。

最後に、郭と中国現代出版業界との関係に焦点を絞り、簡明に中国民営出版組織の再生と郭敬明文化集団の形成過程を整理した上で、郭に関する偽書出版の事情と彼が導いた文学史的事件とも呼べる二度の文芸ムックブームの実態を考察し、中国の正統派文芸誌と伝統文芸界に挑戦する郭敬明文化集団の新しい運営理念や文化生産メカニズムを分析する。

II・20 「八〇後」作品における同時代中国の青年像と韓寒著『1988〜この世界と話したい』（2010年刊行）を中心に

楊 冠穹（東京大学大学院）

近年、「八〇後」世代は続々と社会進出を果たし、自らの中国社会における役割の変化を自覚しており、社会的立場を明確化しようとする意識を強めている。そのような現代中国の青年たちを描き、「八〇後」世代の熱い共感を得ている作家に韓寒（1982）がいる。本報告はそのような現象をめぐり、以下の三方面により考察するものである。

1. 「八〇後」文学と「韓寒現象」…1999年、韓寒は全国作文コンクールで優賞、高校生ながら小説『三重門』で作家デビューし、高校中退や名門大学優先入学権を辞退し、そして反教育的言論によって「韓寒現象」を引き起こした。これをきっかけに「八〇後」文学が中国文化界で認知されたのである。韓寒以降にも「八〇後」作家が大勢いるが、韓寒が描く「八〇後」群像が最も中国青年の共感を得ていると言えよう。

2. 『1988』における天安門事件の追憶…僕は偶然売春婦の娜娜と出会い、彼女との対話を通じて少年時代の記憶が呼び覚まされ、友達を次々と回想することとなる。特に少年時代の僕のアイドルだった丁哥哥を追憶しながら、彼と1989年夏のあの事件との関係を徐々に理解していく。韓寒は巧みなストーリー構成で検閲審査を通過し、天安門事件を知らない中国の若者にまるで事件の真相を探れと呼びかけたかのようなのである。

3. 希望の旅としての『1988』…無力感に浸っていた僕は妊娠中の娜娜から新しい希望を得て、再び旅立ち目的地向かかっていく。記憶の中で、友達一人ひとりの影を見たように、生きていく以上、前に進まなければならない—そのような希望の存在を信じている僕は、まさに現代中国の青年たちの生き様を代表するものである。

韓寒は物語の連続性より、現実世界との繋がりを優先し、社会批判、表現に対する規制との戦いをモチーフとし、低層民衆の物語を構築している。このような韓寒作品からは、今現在の中国における「八〇後」世代の論理と情念とがありありと見て取ることができるのである。

II・21 中国における村上春樹「中国行きのスロウ・ボート」の受容―人気書き込みサイト「豆瓣網」読者ユーザーとの対話―

徐 子怡（東京大学大学院）

村上春樹が1980年4月号の文芸誌『海』で発表した「中国行きのスロウ・ボート」は、彼にとって最初の短編小説である。そして同作は1983年の短編集、及び1990年の『村上春樹全作品1979～1989』第3巻に収録される際に2回書き換えられるほど、村上にとっては大事な一作なのである。作中では、「僕」の回想によつて語られる三人の在日中国人及び「中国」というキーワードが非常に目立っている。これについて日本の研究者は、「：背信と原罪とをより深く自覚することにより到達した、旅立ちのための港：」（藤井省三）、「アジアと日本との関係のアナロジー」（山根由美恵）等々と評している。しかし、村上自身は本作品の創作について、ソニー・ロリンズの演奏で有名な曲「On A Slow Boat To China（中国行きのスロウ・ボート）」からタイトルを抽出し、ファースト・シーンをとりあえず書いた後は、ストーリーが展開していくに任せた、「それ以外にはあまり意味はない」と述べている。更に台湾紙のインタビューに対し、「中国」は自分にとって実在するものではないが、とても大事な「記号」と告白している。

「中国行き：」の創作に際し、村上は「中国」という記号をいかに意図的にあるいは、無意識に用いたのか、これは興味深い問題であるが、報告者はまずは村上受容大国である現在の中国で、同作がどのように読まれており、「中国」という記号はどのような受け止められているのか、という問題を考えてみたい。そこで報告者は、中国の人気書き込みサイト「豆瓣網」の読者ユーザーを対象に、彼らの「中国行き：」に対する読書感想等に関するネットインタビューを実施し、その結果を分析することにより、村上にとっての記号「中国」の意味を考察したい。なお報告者は文芸誌『ユリイカ』2012年7月号掲載の拙稿「中国における村上チルドレンと村上ファッション―人気書き込みサイト「豆瓣網」をめぐる冒険」で同種の研究方法を試みている。

第三部会（Ⅲ日本漢文部会）

Ⅲ・1 『菅家後集』「慰少男女。」論

佐藤 信一（白百合女子大学）

『菅家後集』483「慰少男女。五言。（少き男女を慰む。五言。）」の表現に関して考察を加えてみたい。

この詩は、道真が自らと大宰府への同行を許された幼い子供たちの寂しさを紛らわせようと詠じた作品である。この詩で注目すべきは、道真が己の無念と悲憤を語るのに、「衆姉（衆の姉）」や、「諸兄（諸の兄）」、「少男（少き男）」、「少女（少き女）」といった血を分けた息子や娘たちと共に、「南助」、あるいは「弁御（弁の御）」と呼ばれる道真の周辺での人物の悲劇を叙述しているということなのではあるまいか。詳細は控えるが、「南助」とは南淵年名の子息であり、南淵年名といえは、道真の父、是善の友人で『菅家文草』巻二、78「暮春、見南亞相山莊尚齒會（暮春、南亞相の山莊の尚齒會を見る。）」に「南亞相」とあった。さらに「弁御（弁の御）」が徒裸足の乞食姿で「琴」を弾いているという。この「弁御（弁の御）」も貴族の娘であると道真は自注している。「琴」とは元来、君子の弾くべき楽器であった。「右書左琴」が君子の学問を語る際にも重視されていたのは疑いない。それは実際、そうであったからというだけで片付けてしまつてよいのだろうか。ここで『菅家後集』482「絃意一百韻。五言。」の「貪婪興販米、行濫貢官綿。鮑肆方遺臭、琴聲未改絃（貪婪興りて米を販ぐ、行濫官綿を貢ず。鮑の肆は方に臭きことを遺す、琴の聲は未だ絃を改めず。）」という表現との類似が注目される。ともに従来の学問の友としての「琴」の側面は全く捨象されているのである。このような観点から「慰少男女。」の表現を、道真の他の詩とも比較しながら検討して行きたい。

Ⅲ・2 塚田大峰の人間観―『聖道弃物』を中心に―

小崎 智則（愛知教育大学非常勤講師）

塚田大峰は寛政異学の禁に反対した所謂「寛政の五鬼」の一人として知られる。しかしながら亀田鵬斎や山本北山に比肩するほどの知名度はなく、その思想に関してさほどの注目を集めては来なかった。確かに塚田大峰が江戸漢学全体に及ぼした直接的影響はほとんど見られず、また、折衷学派に分類される思想の無指向性もその一因であろう。一方で、尾張藩儒としては、藩校明倫堂の督学となるや学規を改正し、朱注を廃して古学を主とし、教科のほとんどに「冢注」を冠した自注の教科書を用いるなど、学風を一変させた人物であるという側面も有している。

周知のように徂徠学は経世済民を専らとし、道徳や人倫の学としての面を儒学から排除することによって、道徳的基準としての理や心を重んずる朱子学に対抗した。塚田大峰は、徂徠とは逆に聖人の道から政治や経済を除外し、儒学を明確に道徳学と規定する。但し、その著作『聖道弃物』においては道・徳・孝・悌等を挙げて定義を説くが、朱子学が重視する心・理・性といった語がなく、これら概念には積極的関心を払っていない。他方、学問の最終目的はよりよい政治を実現する為の人材育成にあるとも主張している。また、その背景には人間の性情は天性の善でも悪でもなく、人ごとに異なった個性を有するが、一般的には初めはその差が小さい、とする人間観がある。

寛政異学の禁に際して、塚田大峰は尾張藩主に宛てて、人の好みは各々異なる故に程朱に限らず好む所の流派を学ばせるべきである旨の上書をしている。このことは、明倫堂督学としての態度と相容れないように思われる。人の性に善悪はないとしつつも画一性を否定し、学問から政治や経済を排除しつつも政治に有為の人材育成を説くなど、この一見矛盾に満ちた塚田大峰の思想に関して、本発表では一定の合理的理解を得たいと考えている。

Ⅲ・3 『漢書抄』『帝紀』における全相平話『前漢書統集』の抄写について

菅原 尚樹（東北大学専門研究員）

『漢書抄』『帝紀』とは、道号を景徐（一四四〇～一五一八）という五山の禅僧の手になる抄物である。『漢書』を講義する際の手控えとして、明応（一四九二～一五〇二）ごろに書かれたとされる。現存する『漢書抄』『帝紀』は、この景徐抄の原本を、大永三（一五二二）～二四）年ごろに清原宣賢が筆写したものである。

『前漢書統集』とは、元の至治年間（一三二一～二三）に刊行されたと考えられている全相平話五種のうちの一種で、前漢の歴史を物語る通俗的な白話作品である。

景徐の『漢書抄』『帝紀』は、『漢書』を講義する手控えであるのに、正史『漢書』の記載ではなく、『前漢書統集』を抄写している。その際、景徐は『前漢書統集』の文章を一字一句余さず引用するのではなく、抜き書きする形で『漢書抄』『帝紀』を記している。

すなわち該書は、景徐自身の価値判断による字句の取捨選択を経て成っていると見える。そこには、景徐がどのような意図をもつて抄写したのか汲み取る余地が残されていると考えられる。なぜ景徐は、『漢書』ではなく『前漢書統集』を抄写する形で『漢書抄』『帝紀』を成したのだろうか。『前漢書統集』という白話作品の叙述を理解したうえで、『漢書抄』『帝紀』を抄写しているのか。その抄写態度より、十六世紀当時の本邦の知識人が、中国の通俗白話作品をどのように受容したのか探ることができるであろう。

本発表では、全相平話『前漢書統集』の叙述が、『漢書抄』『帝紀』にどのように抄写されているのか検討する。検討を通じて、全相平話受容の一側面を、本邦の書籍からうかがってみたい。

Ⅲ・4 林羅山における日本神国観——朱子学理氣論とのかかわりをめぐって——

章 佳 (広島大学大学院)

江戸時代初期の儒者である林羅山(一五八三—一六五七)は、先駆的に朱子学を自分の思想に本格的に取り込んだため、「日本朱子学の祖」とされる。彼は朱子学理氣論を自分の思想に導入し、儒教学説だけではなく、「理当地神道」という独自の神道思想までを提唱している。その理当地神道において、羅山は朱子学理氣論・鬼神(キシシ)論の説を多く用いて、神道・神(カミ)を説明した。

この神道提唱の文脈で、羅山は他の近世初期の思想家と同じく、自分の日本神国観を唱えた。朱子学理氣論を普遍主義的・合理的な思考法であると考えた場合、日本神国論というのは個別的・特殊な現象になる。とすると、先学が指摘したように、朱子学理氣論は「神国」日本に適用しがたいように一見みえる。しかし羅山は「儒書ヲ以神書ヲ解時ハ、道理分明也」(『神道秘伝折中俗解』卷第十三「三種鬼神」という。儒学(朱子学理氣論が柱となる)が神道の神(カミ)を覆うことができるという羅山の確信が、この一文から読み取れる。

ここで注意をしたいのは、羅山が受容した朱子学は、江戸初期と同時代の中国明代のやや先行するものであったことである。科挙参考書等に加え、羅欽順の『困知記』、陳建の『学菑通辨』、詹陵の『異端弁正』などの影響が強いことが、先学によって説かれている。羅山の朱子学理氣論はこれらに影響され、原朱子学からはやや偏った論となつてることが予測される。日本の神々や日本神国論を朱子学鬼神論で説くのは突飛であるかのようにみえるが、しかしこの明代朱子学及び羅山の理氣論を検討すると、羅山が行き着いた右の確信も、不自然ではないものとして解釈可能であろうと本発表者は考える。

本発表では、羅山におけるこの日本神国論と朱子学理氣論との親和的関わりを考えたい。

Ⅲ・5 長尾雨山が上海で参加した詩会について

松村 茂樹（大妻女子大学）

大正三年（一九一四）十二月、漢学者・長尾雨山（一八六四—一九四二）は、足かけ十二年にわたる上海滞在を終えて帰国し、京都に卜居して、関西文墨界の指導者的存在となる。そのきっかけとなったのが、雨山の主宰になる寿蘇会・赤壁会という宋の蘇東坡をしのぶ詩会の開催であった。

寿蘇会・赤壁会には、学界・書画文墨界のみならず、財界・新聞界などから漢学の素養を有する人士が集い、内藤湖南（一八六六—一九三四）や犬養木堂（一八五五—一九三二）の人脈とも重なって、一大ネットワークを形成し、大きな影響力を有することになる。雨山は、「私が支那におりました時分に：毎月集まつて詩を作つたりすることもやつておりました。一日詩会がありました。そのとき偶然蘇東坡の誕生日にあたつておりました。」（『中国書画話』）、「以前、私は中国に客遊し、たびたび彼の地の名流と共に蘇公生日の宴会をした。帰国後、京都に寓居し、なお故事を継修しようとして、乙卯の年（一九一五）、富岡君擣（富岡鉄斎の長男・富岡桃華）と謀つて寿蘇会を開いた」（「丁巳寿蘇録序」原文漢文）と述べており、これらの会は、中国で参加した詩会を日本でも行おうとしたものであることがわかる。

この雨山が中国で参加した詩会については、管見の及ぶ限りでは論及されていない。本発表では、雨山が、一九一二年、隣人となった呉昌碩（一八四四—一九二七）の紹介により、周夢坡（一八六四—一九三三）が主宰する消寒雅集（消寒集）・淞浜吟社（淞社）といった詩会に参加していることを指摘し、それらの詩集である『壬癸消寒集』『淞浜吟社集』に収められている雨山の詩を紹介したい。そしてさらには、周夢坡主宰の詩会の性質を分析することにより、雨山が日本にもたらそうとした中国の詩会の本質を明らかにできればと思う。

Ⅲ・6 「道德教育」の視点を踏まえた漢文教育——漢文教材から生き方を考える——

秋山 恵美（御所野学院高等学校）

高等学校では道德の教科書を用いた授業は行われていないが、高等学校学習指導要領の総則第1款には「人間としての在り方生き方に関する教育を学校の教育活動全体を通じて行う」と明記されている。

私はこれまでも、漢文の授業で中国思想を扱う場合、この「道德教育」の視点を意識してきた。儒家や法家の思想は、生徒の心に揺さぶりをかけ、現在の自分の在り方を見直し今後の生き方について考えさせるのに最適な教材である。本文の読解だけに終わることなく、学んだ思想内容をもとに自分のことを見つめさせる課題を常に用意してきた。そこで、今回の実践においても、『論語』子路篇「葉公語孔子曰」と『韓非子』「侵官之害」を取り上げ、道德教育の視点を踏まえた授業展開を探ることにした。

『論語』では、孔子と葉公のいう「直」の違いを押さえた上で、自分の肉親が罪を犯したときにはどうするかと問い、全員に意見を発表させる。そして、他者の意見を聞いた後に再考させ、反対意見にも配慮した最終意見をまとめさせる。その結果から、生徒一人一人の思考の過程を読み取るとともに、集団全体の学習効果についても検証していきたい。「侵官之害」では、本文を読む前の導入部分に時間をかける。酔っ払って寝てしまった人に対してどのように振る舞うかを問い、次に典冠者と典衣者の仕事内容について説明した上で、自分が典冠者だったらどうするかと問いかけ、個人としての振る舞いと社会人としての対応が異なることに気づかせたい。本文の読解を行った後で同じ質問を投げかけることにより、読解前と後での意見の変容も確かめたい。さらに、越権行為を死罪とする法家思想の厳格さについて、現代社会の状況と関連させながら考察させるつもりである。これらの実践を通して、道德教育の一環として位置づけることが可能だ、と私は考える。

1 古典文学研究の方法―陶淵明などを例にして

日本中国学会顧問・(公財)斯文会理事長・全日本漢詩連盟会長

石川 忠久

「菊を采る東籬の下、悠然として南山を見る」の句で知られる陶淵明は、いかなる存在であったのか。

およそ、古典文学を読み、味わい、その価値を論じたりするのは、いわゆる“芸術”の分野に属することだが、作者の人物を論じたり、作品の眞贋を弁じたりするのは“科学”の分野に属すると言えよう。

科学の分野に属することを研究するには、思いこみや先入観を排し、極力科学的方法に拠らねばならない。また、作者や作品は当然のことながら、その時代の“制約”の下にあり、それだけが突出して存在することなどはあり得ない。従って、時代への目配りも必要であり、その為には、歴史資料も吟味しなければならぬことになる。

この度は、幸いに機会を与えられたので、陶淵明研究に関する年来の卑見を述べ、些か他に及びたいと思う。

2 中国の政治文化について

元いわき明星大学学長・東北大学名誉教授・鹿角市先人顕彰館名誉館長 寺田 隆信

中国における政治文化は皇帝・官僚・庶民の項目に分けて説明できる。皇帝政治は始皇帝から清末にいたるまで、二千年以上継続するが、その前半期、とくに六朝から隋唐時代にかけて、権力は貴族たちに握られていたといえる。貴族は郡望の家柄にもとづいて抬頭し、社会的地位は皇帝一族に勝ると認められて、政治の実権もまた貴族全体の専有であった。貴族の出身でなければ高位の官職につくことはできず、君臣関係は家柄の高下とは一致しなかった。こうした状況は宋代以後次第に変化し、貴族の消滅をうけて、皇帝は社会組織から分離して政治組織に独尊の地位を占め、明清時代にいたって完全な独裁体制をつくりあげた。すべての権力は皇帝がこれを保持し、家柄でなく科挙をつうじて任用された官僚が支えたが、宰相すらも秘書のような存在となり、地方官は監司のもとにおかれ、積極的に民政の保全につとめるのに冷淡となり、ひたすら過失を咎められるのを恐れ、任期を終えて他に栄転することのみを考えるようになった。これと平行して、官僚となることを致富の手段と認める意識も社会的に定着する。こうした政治のあり方が亡国につながったとする見解は、明末清初の学者たち（顧炎武・黄宗羲・王夫之）によって提示されたが、清朝の成立とともに、その支配が明朝よりも概して善良であったのも手伝って、政治の私たちは改変することなく明制は継承された。一方、被支配者である庶民の側からすると、行政が民治に盡力するのを放棄するならば、官僚に頼ることはできず、自ら生活を守って自営するほかなかった。かくして清末にいたり外国との関係が生じてくると、政治の欠点が一層明らかとなり、政治組織を改善せねばならぬとして、変法自強の論が盛んとなったが、間もなく清朝は倒れて共和国の誕生となる。その間、宋代以降、少くとも一千年の慣行であった政治文化に変化は生じたのか。

特別展示内藤湖南博士「湖南小稿」紹介

内藤湖南（一八六六—一九三四）は、名は虎次郎、字は炳卿、湖南と号す。慶應二年（一八六六）七月十八日、現秋田県鹿角市毛馬内町に南部藩・藩儒内藤調一（号は十湾）の次男として生まる。明治十七年秋田県師範学校（現秋田大学教育文化学部の前身）の高等師範科を卒業し、秋田郡綴子つづれ小学校首席訓導に任じ、後に職を去って上京し大内青巒居士の許で「明教新誌」の編集を担当、明治二十二年九月愛知県岡崎の三河新聞社に入社、記者となる。ついで雑誌「日本人」及び「亜細亜」の編集を経て大阪朝日新聞社に入社、その後東京において著述に従事、「近世文学史論」「諸葛武侯」「涙珠睡珠」の三書を刊行して文名を馳せ、更に台湾日報社の記者として渡台し、八ヶ月滞在の後、明治三十一年に帰京し東京萬朝報社の主筆となる。翌年中国各地を遊歴し「燕山楚水」を著し、支那研究に全力を傾倒す。明治三十三年再び大阪朝日新聞社に入り論説を担当、同三十五年に満州各地を視察、日露の風雲急となるや開戦論を以て輿論を導いた。同三十八年小村寿太郎大使の招電により北京に赴き、同三十九年外務省囑託となり、満州・朝鮮各地を視察す。同四十年十月に京都帝国大学文科大學講師に任ぜられ、東洋史講座を担当、同四十二年文科大學教授に昇任、同四十三年文学博士となる。この間、敦煌文書その他諸史料を調査・採訪し、大正十三年には欧州各国を視察、同五年に帝国学士院会員、同年退官して名誉教授。退官後は京都府相楽郡瓶原村にて専ら読書生活に入り、傍ら国宝保存会委員、東方文化学院評議員、日滿文化協会理事等の要職を担った。昭和八年に病を押して日滿文化協会設立の為に渡滿。翌昭和九年病進み六月二十六日に逝去。享年六十九。正四位勲二等。法号は靜處湖南居士。博士の著述は「東洋文化史研究」「支那論」「支那古代史」「支那史学史」「支那學論叢考」「日本文化史研究」「清朝衰亡論」等夥しい。

特別展示の「湖南小稿」は博士の秋田師範及び綴子小学校訓導時代を中心とする青年期の自作漢詩の自筆稿で、鹿角市先人顕彰館に所蔵される貴重資料。今般同館の特別の許可を得て日本中国学会第六十五回大会の開催に合わせて秋田大学付属図書館にて展示公開の運びとなりました。

○ 秋田市内の大学周辺の宿泊施設について

* 懇親会場の秋田キャッスルホテルは、日本中国学会用にシングル50室、ツイン25室を準備しています。申し込みは直接ホテルのフロントに電話してください。その際に「日本中国学会会員」と告げれば優先的に手配されます。万一、フロントが「満室です」と答えた場合は他の宿泊施設をお求めください。料金は、朝食込みで、シングル：8,000円、ツイン：(1人泊)10,000円、(2人泊)14,000円です。

連絡先は本大会要項の裏表紙に記載されています。

* 秋田大学の半径4km圏内の温泉を伴う主な宿泊施設としては以下のものがあります。

秋田温泉さとみ：Tel 018-833-7171 添川境内川原142-1

秋田温泉(秋田温泉プラザ)：Tel 018-833-1919 添川境内川原142-3

ドーミーイン秋田：Tel 018-835-6777 中通2-3-1

ホテルグランティア秋田：Tel 018-825-5411 中通5-2-1

○ 史跡「手形山」のご案内

秋田大学手形キャンパスの東方には標高97.8mの手形山があります。山頂には縄文時代の杉沢遺跡(現柳沢遺跡)があり、山の東南山麓には遥か太平山山頂の本殿を臨む景勝の地に太平山を祭る里宮としての太平山三吉神社があり、他の三方の山麓には三座の仏閣が立ちその墓域が背後の山腹に広がっています。いわば手形山は死者の眠る聖なる山の趣を成しています。

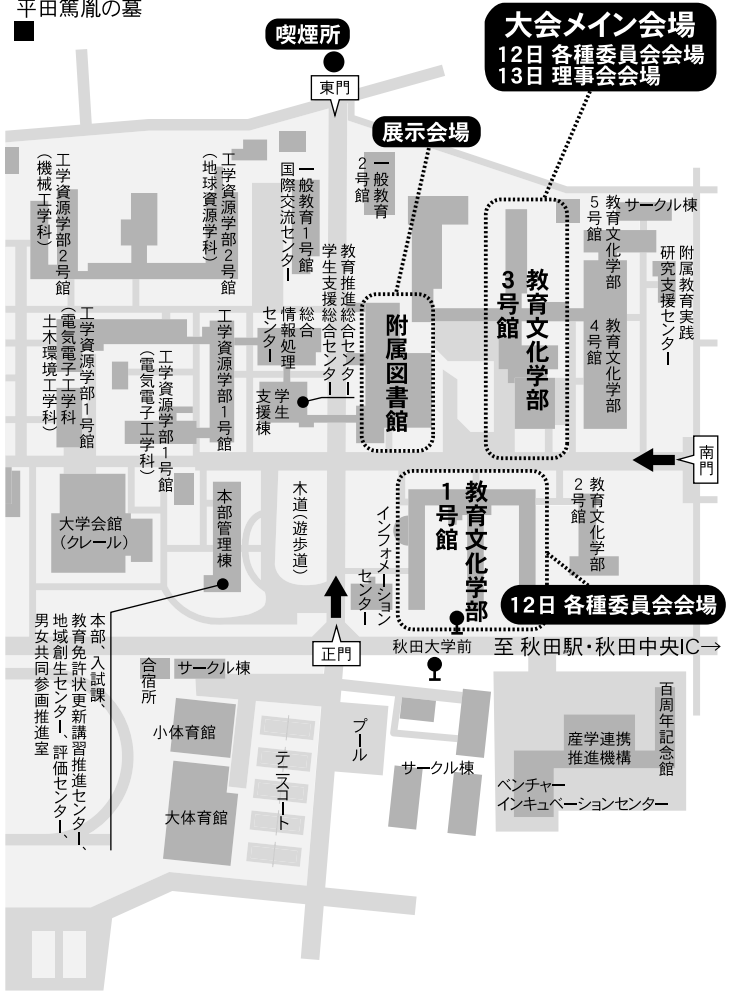
秋田大学手形キャンパスの東門を出て左折し北に歩みを取ると右手に「国指定史跡 平田篤胤の墓入口」の標示が見え、鳥居をくぐって階段を上った山の中腹に、荷田春満、賀茂真淵、本居宣長と共に「国学の四大人」に数えられる平田篤胤の墓域があります。衣冠束帯の正装の墓主が葬られたその墓は、篤胤がその没後の門人として師と仰いだ本居宣長の伊勢の方角に向かって鎮座しています。またその右手には秋田久保田藩の初代藩主佐竹義宣の正室の墓所である正洞院(明治初期に廃寺)の史跡があります。

平田篤胤の奥墓の墓道を北にやや降りて歩んでゆくとその先の手形山の中腹に秋田大学鉱業博物館があります。同博物館は、秋田大学工学資源学部の前身で日本唯一の官立の鉱山専門学校であった旧制秋田鉱山専門学校以来の歴史を踏まえて、教員や鉱山事業の第一線で活躍する卒業生たちにより、教育や研究の為に、近代日本の歩みと共に地球上のあらゆる地域から齎された貴重鉱物を一堂に展示する博物館です。この種の博物館としては我が国を代表するものの一つと言えます。同館は日本中国学会大会期間中もオープン(午前9時～午後4時、入館料100円)しています。

○ MEMO

※御参会の方は正門または南門から御入構下さい。

平田篤胤の墓

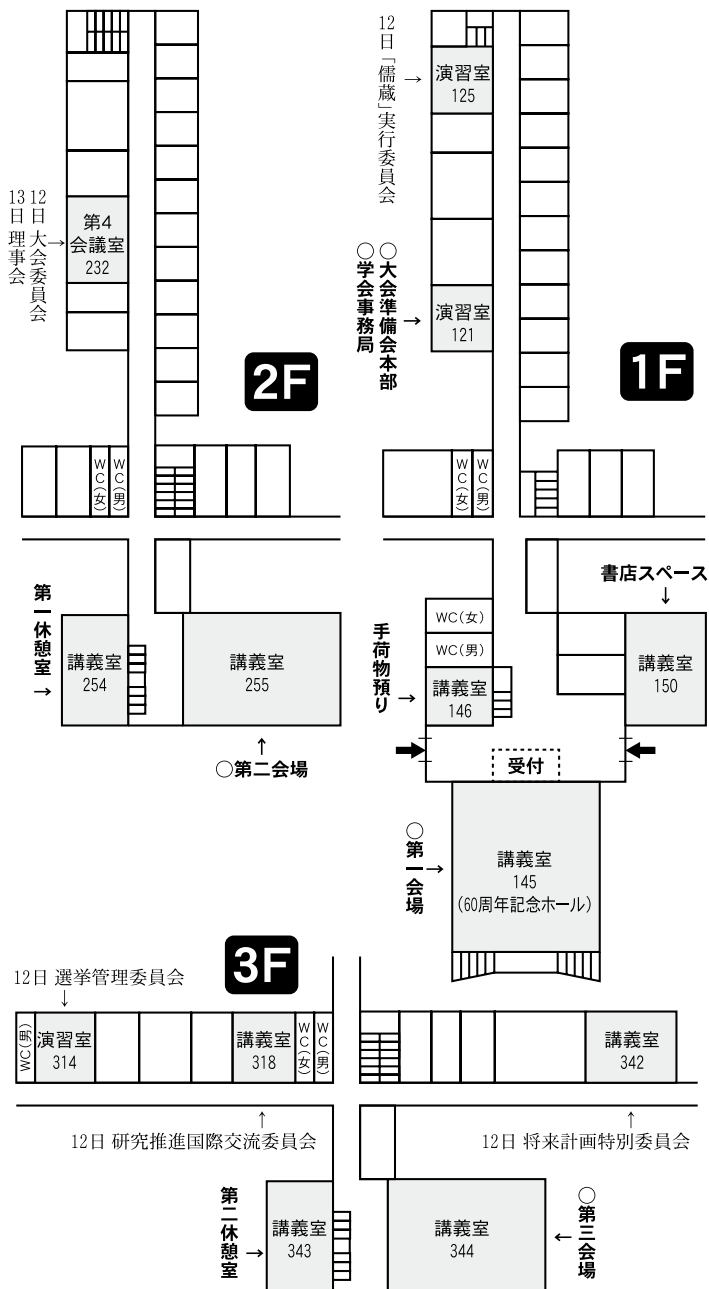


構内施設配置図

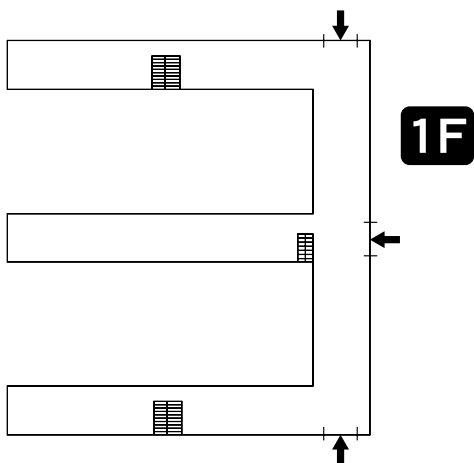


大会会場案内図

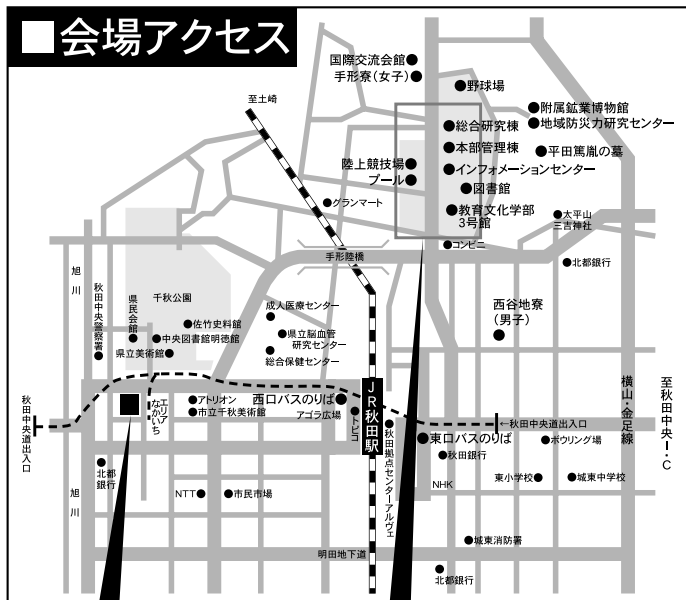
教育文化学部3号館



教育文化学部1号館



会場アクセス



懇親会会場 秋田キャッスルホテル **大会会場** 秋田大学手形キャンパス

〈大会会場〉 秋田大学手形キャンパス

(教育文化学部3号館および総合教育棟)

〈内藤湖南博士「湖南小稿」展示会場〉 秋田大学付属図書館
(手形キャンパス構内)

〈懇親会会場〉 秋田キャッスルホテル 4階 放光の間
〒010-0001 秋田県秋田市中通一丁目三番五号
Tel. 018-834-1141 <http://www.castle-hotel.jp>

〈秋田まで〉

- 東京から：①羽田空港—秋田空港 (1時間5分)
②秋田新幹線「スーパーこまち」東京駅—秋田 (3時間55分)
③高速バス「フローラ号」新宿西口—秋田駅 (約8時間)
- 横浜から：JRバスドリーム秋田・横浜号 横浜駅—東京駅—秋田駅
(約9時間40分)

- 名古屋から：中部国際空港—秋田空港 (1時間25分)
大阪から：大阪国際 (伊丹)—秋田空港 (1時間20分)
札幌から：新千歳空港—秋田空港 (55分)

※秋田空港—秋田駅リムジンバス：
秋田駅西口1番乗り場 (40分、毎日17便)

〈秋田駅から秋田大学まで〉

- バス：秋田駅西口4番乗り場「手形山経由大学病院線」秋田大学前下車 (約6分)
タクシー：秋田駅東口タクシー乗り場—秋田大学手形キャンパス (約5分)
徒歩：秋田駅東口より徒歩約15分 (1.3km)

〒010-8502 秋田県秋田市手形学園町1番1号
秋田大学教育文化学部 日本・アジア文化講座内

日本中国学会第六十五回大会準備会

TEL 018(889)2609/018(889)2665